

犠牲 (上巻)



高義画

犠牲 (上)

里見高義



撰者について

昭和六十二年春 高知新聞社が「戦争体験記」を募集しました。応募数二九二編中一五編が入選作品として発表されることになり同封の私の作品が八月二十二日付け高知紙上に掲載されました。原稿用紙一〇枚以内という規定でしたので内容も行き届かず読者の皆さん五〇数名の方よりいろいろなお問い合わせをいただきました。

ひとりひとりへお応えするのは大変ですが、復員直後に書き留めていた体験記録の要約をこの拙著「撰者」として纏めて郵送させていたことでした。

この撰者は復員した戦友(今は一八〇名中一七名)や遺族、近隣の人その他知人に尋ね上げたりしました。土佐電見一族の祖先たちが活躍していた彦総の地、中津島(たけやま)市やえきや、安田高次氏の要請で国会図書館の資料部へ納入することになり、そのうち善通寺の自衛隊、奈良泉の図書館等へも届けております。

純粋のドキュメンタリー(実録)であること、悲慘であること、最後の作戦命令(投降命令)、中隊の編成表があることなどが読み取る方の胸を撃つようです。

拙い表現でしょうか。最後までお読みくださって、遙か遠い南の島で導い命を絶ち、朽葉の下深くで白骨化した。その将兵のためにほんのひとときでも祈りを捧げていただきたいと存じます。「一将功成り万骨枯れる」という句がありますか。このたびは万骨枯れて一将さえ功は成りませんでした。ひたすらに平和を願ったが撰者の幸福を祈っている現在です。「靈魂に永劫の安らぎを」

〒785-0162  
高知県高知市内宮分二二三一三  
里見高義  
電話〇八八九四九〇三〇六

從軍当所の生 藤

一	闘	い	二二
二	正月	月	三三
三	勤務	務	四六
四	決	心	五九
五	赤い花	花	八三
六	善悪	悪	一〇四
七	乱れる心	心	一一八
八	戦友たち	たち	一五三
九	地方色	色	一七一
一〇	愛する心・愛される心	心	一八〇
一一	患者	者	一九三

目次

一頁

巻頭言

わたしの軍隊生活、ことに一年七か月に亘る比島戦線における体験は、真に尊く意義あるものであった。わたしは辛うじて持ち帰った走り書きの日記と、ありし日の生々しい記憶を綴り合わせて偽りない一書を得、やがて将来敷ってくるであろう苦難に処するわたし自身のことろの糧に充てようと思う。

いままなお、そのままに浮かんでくる戦友諸氏の御交誼を謝し、併せて、今は亡き友らの瞑福を切に祈る。

昭和二年五月三日

高我

( / )

一九、五一  
〇・四八 善通寺駅出発 初陣なり。

一九、一三

門司出港 予所接種準備 中隊編成表作製など多岐

一九、一五

高知陸軍病院へ残してきた班員たちと憶うと何か寂寥せきりゆうを感じ。わがうすり丸は台湾の南端を離れ、いよいよバシー海峡バシー海峡に入った。このあたりは単に暖流と潮流の関係から異様な波濤はとうが逆巻さかまきくだけてなく、すでに連合軍水雷艦の出没のためもあり、かなり緊張した無気味むきみを思う。

実に暑苦しい船内の生活は大分馴れはしたものの兵隊たちは隊毎にする対空、対艦監視や対敵行動への訓練に忙しい。検便名簿調製のためキヤビンにゆくと、扇風機

( 1 )

...

が勢いよく廻っているが汗はひっきりなしに出る。

一九・五・一七

正午近く、盆を覆えず勢いでスコールが襲来したか、たずまち密れ上つて快晴となる。終日ルソン島の西岸を航行するが、明日も夕刻まで続くとか。

一九・五・一八

船団は、いよいよマニラに入港するのだ。マニラ湾口も扼するコレヒドールは、新聞で見えていた通り白い敵の兵舎が生々しい爆轟の跡を止めて先年の激戦を偲ぼせる。一七時・マニラ沖に入る。甲板から眺める街の灯が美しい。夕食を終えた日没の頃には中隊のほとんどの全員が甲板へ上っている。わたしは、申之保・大地の三人で船尾に陣取り、落ちていくマニラ湾の夕陽をいつまでも、いつまでも眺めていた。と、何処からか船員の弾くギタ

ーが胸詰る感傷をもつて迫ってくる。船員も哀れなエトランゼだ。不健全な船員の日々の生活に情を寄せてみるか、とかく他国の空の日暮れは他びしい。ギターはさらに哀しく愁いを含んで空しい調べも掻きたてては夜の中へ消えていく。

一九・五・二六

船「うすりの丸」は七号岸壁に着く。こいつは実に大規模なもので、長さ一〇三三呎、幅三三〇呎の二階造りで一万噸級の船舶が同時に四隻繋留できるそうだ。上陸すれば一先ずマニラ兵站宿舎に一泊ということになるだろう。

一九・五・二七

島本中隊は雨が出港。マクタン島へ移動というのに、船内で赤痢を發病した森忠治を入院させなければならぬ

い。徳久見士に同道を依頼し、馬車に揺られてマニラ兵  
站病院ゆき、これしてなものである。留為商經營の車栖  
氏の何処かの街角で念入りな予感がする。豪華な病院  
の美しい南國の花に一瞥する。

一九六三

ここは、探險家フェリナンド・マゼラン懺死の地、マ  
クタン島。土民の酋長ラプラプによって殺される。

土民の言語で「米」を意味する「ホマエホマエ」に設  
営して今日で四日目。遠い故郷の村々が無精に恋しい。  
セブに渡って旅団の軍医部を訪ねたが暑いことは夥  
しい。街々は賑やかであるが概してヒリッピン人は、お  
しゃべりで浮つ調子。そして政治好き議論好きのようだ。  
ただアメリカ文化の俗悪さが眼につくばかりで、シビリ  
アンの間には伝統的な文化はなげれば、新しい文化を創

\* フェリナンド・マゼラン  
ポルトガルの探險家。1521年3月に  
フィリピンを発見。マクタン島にてセブ  
の酋長ラプラプによって殺害される  
5隻の船と270人の船員は1隻と  
18人となった。  
太平洋を Pacifico や philippino を  
名付けた。また地球の円形を証  
明した。

造しようとする意欲さえ疑われる。

バンカに乗ってオポンに渡り、バライに帰った夕暮れ  
柳子の葉末に輝やく南十字星を眺めていると、土民の力  
ンタが聞えこくる。九中隊の中西伍長が部屋の中は蒸し  
暑い蚊かいてやり切れない。と、いつか遊びに来た。  
「全くそうだ。戶外へ出ようか」と二人は外に出る。

草に腰をおろして十字星やオリオン星座の話などして  
いるうち、あの肩高い土民たちの歌聲はなおも続いてい  
る。同じ文句を幾度も幾度も繰り返しているかのような  
あの島民歌。それはまた手を叩いたり新しの調子をとつ  
たりしている音が餅を搗いているかのようなし響こえる。  
周囲七重という小さい島の海辺の一角に彼等だけが固ま  
っている土民達か今夜もまた踊っているらしい。  
「やっとなるな」。中西の声に、こんなにはいい月だもの、

始まらずにはいないよ」とわたしは應える。  
 遅くなったので、明日の患者診断と薬物の協定をして  
 二人は別れた。バライで独り横になると、何かでカツ  
 コウ・カツコウを鳴いているものがある。蛇踏だ。もう  
 夜も更けた。

一九一六、一七、紅丸にて

ギラギラと眼を射るようにまばゆい珊瑚礁のホマエホ  
 マエを離れて二日目、私達中隊はセブ・ネグロス島の北  
 部海面を進行する。紅丸の人となっていたのだ。海上  
 で、毎日のようにスコールがやってくる。海水はすぐ燃  
 んで、その後綺麗な風が甲板を吹き、全く蘇生のおし  
 いかする。東の方に漆黒の雲が漂っているが、西のハネ  
 イ島あたりの上空には美しい虹が現われた。  
 船の近くにとびうおが群小飛び、海豚の群が巨体を

空中に跳び出させては競泳をしようとして潜水を始める。  
 南の風はしきりに冷たいで、名知れぬ、椰子の繁る小  
 さい島々は踊るようになり近づき、そして遠去かっとい  
 く。そして、やがて夜を迎える。  
 わたしは初年兵の一隊へ割り込んでいった。  
 「おまえ達は南十字星を知っているのか。」  
 「いいえ。」  
 「駄目だよ。気を付けて見ないと……あれだ、あれだ。」  
 わたしは指さす方を兵隊が見入る。  
 「ほら、あそこによく光る星が四つあるだろう。あれを  
 縦横に二本の線でしって結んでみろ、十の字にクロスす  
 るように見えるだろう。いわゆる南のサウス、南方のサ  
 ン、十字架のクロス、つまりサザン・クロスという星  
 星座だ。」

「ほほう。あ、か、……。し。月はないか、空は一面銀砂を撒いたかのようには輝いて美しい。」  
 「随分日本を敵めたな。わたしは独りごちて船室にしかいった。」

一九、七、二三、セブにて

後田軍医部付としての勤務に忙殺されていたわたしと白石伍長は久し振りに外出。貰ったばかりの俸給四ナセ円も飲み尽くすべくバー<sup>Bar</sup>に入る。の<sup>ラスネイオン</sup>のウイスキーは格別の味。帰途、過日偶然に知り合った前マニラ大学哲学教授だったとかの紳士の家に立ち寄り。

一九、八、一五、バコロド

いよいよギンバラオンへの進展を明日に控えて、下士官以上の宴会が棧橋の陸軍俱樂部で行なわれる。

一九、一〇、二〇、サラビア、駐屯

七十料のスピードでサラビアの中隊に赴く。運転は森岡英則。二十時、作業場から帰隊。二十一時、嗚呼。雷鳴豪雨のため寝つかれず、そのまま一夜を明かす。連合軍、レイテ島タクロバンに上陸とのこと。

一九、一〇、一四、バコロドにて

思わず持った雑誌マガジンの中に父に似た写真を見る。小学校時代、学期末の通信簿を見ながら、こうして微笑んでくれた父の笑顔がたまらなくなつた。美しい。子らの帰りを待ち他びつつ死んでいった父よ。安かれ、と、わたしは祈る。

カラバオ(水牛)の草履も高原を掃めて燕かたびさうバコロドの街外れで静かにものを思うとき、父の何物かかせつせつと湧き起ってくる。また眠れぬ夜、自分の大脳

皮膚へ千切小千切れに思い浮かんでくる幻想の断片、  
この父の顔である。

一九、一〇、二一 バコロド

一時一五分起床。サラビア空港へ赴く。

昨夜未着陸した友軍機四式七十機全機離陸、シイテへ  
赴きたりと聞く。(合掌)

一九、一〇、二六 バコロド

山口部隊に配属中の鍛工、中島共理衛上等兵以下五名  
が中隊に戻る。みな元気で嬉しい。さつさく、心隔てぬ  
友、中島は、医務室の番を依頼し、連続業務のため  
ラビア  
「DINK」に向かう。参謀長は例の胃病の予後が  
はしからぬのか休務中であるとか。

一九、一一、五、タリサイバニ

一一時・コンソリ  
二十六機編隊くる。

と Bacolor の空港、いれられ爆撃され被害甚大なり。

一九、一一、一四、サラビア

三時起床、近辺に新たな機動部隊と空輸部隊が出現し  
たと聞く。ユサツペ(敗匪)の行動最近とみに悪化せり。  
「翼」特別攻撃隊四十八機、おのおの翼の下に爆弾を抱  
き、これの患滅に赴く。椰子の葉末に仰ぐ友軍司偵機の胴  
の目の丸が眼にしむほどに赫い。

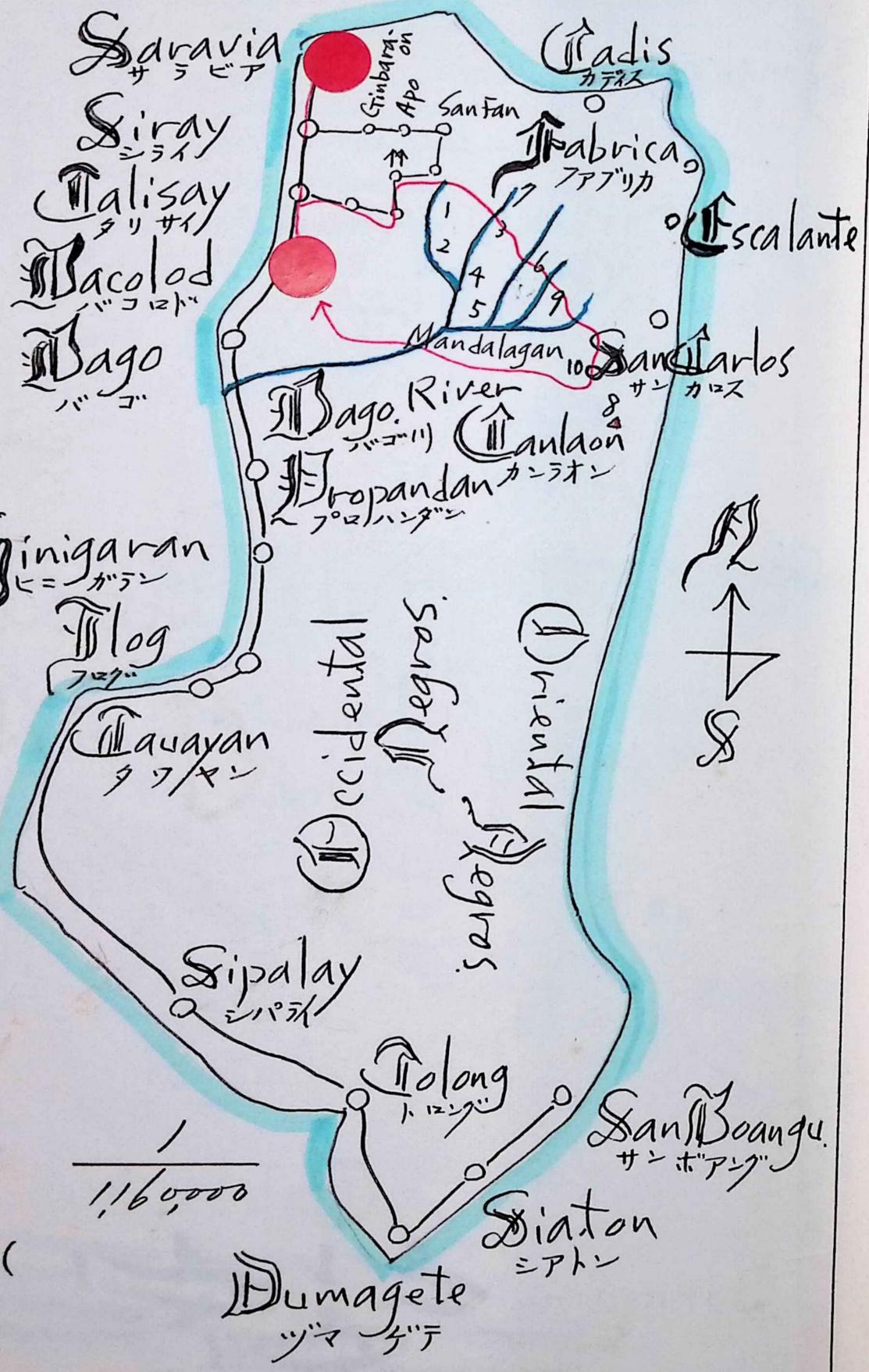
この日、わが誕生日なり。心ばかりの祝いとて一本六  
円也の煙草をくゆらせているとまたロツクヒード数機  
の襲撃に遭う。安易な一日を欲す者あり。

すでにわが工兵隊の疲労はその極に達し、受診患者中  
練兵休かなり多し。休息と休養の時間を与うべし。

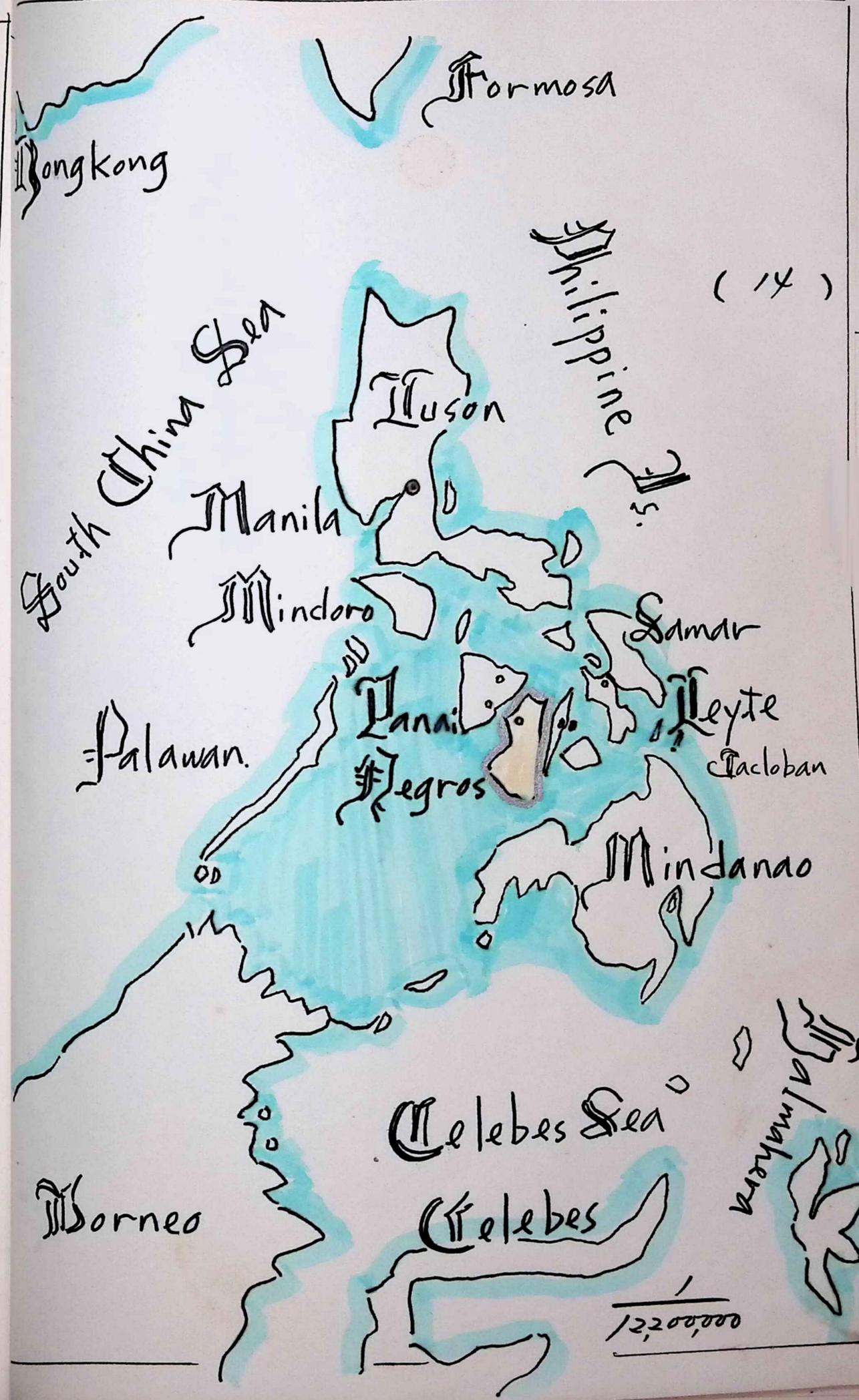
鈴なりのサラビア椰子の実を採る老翁の裸体夕陽に映  
えて美し。

Regros Is. (4,903km<sup>2</sup>)  
ネグロス 島

(15)



1. 太郎山
  2. 孫太郎
  3. 剣ヶ峰
  4. 天神山
  5. マンダラガン
  6. 浅間山
  7. シライ山
  8. カンラオン ▲
  9. 地獄岩
  10. カマリスク
- ▲ = 本椰子



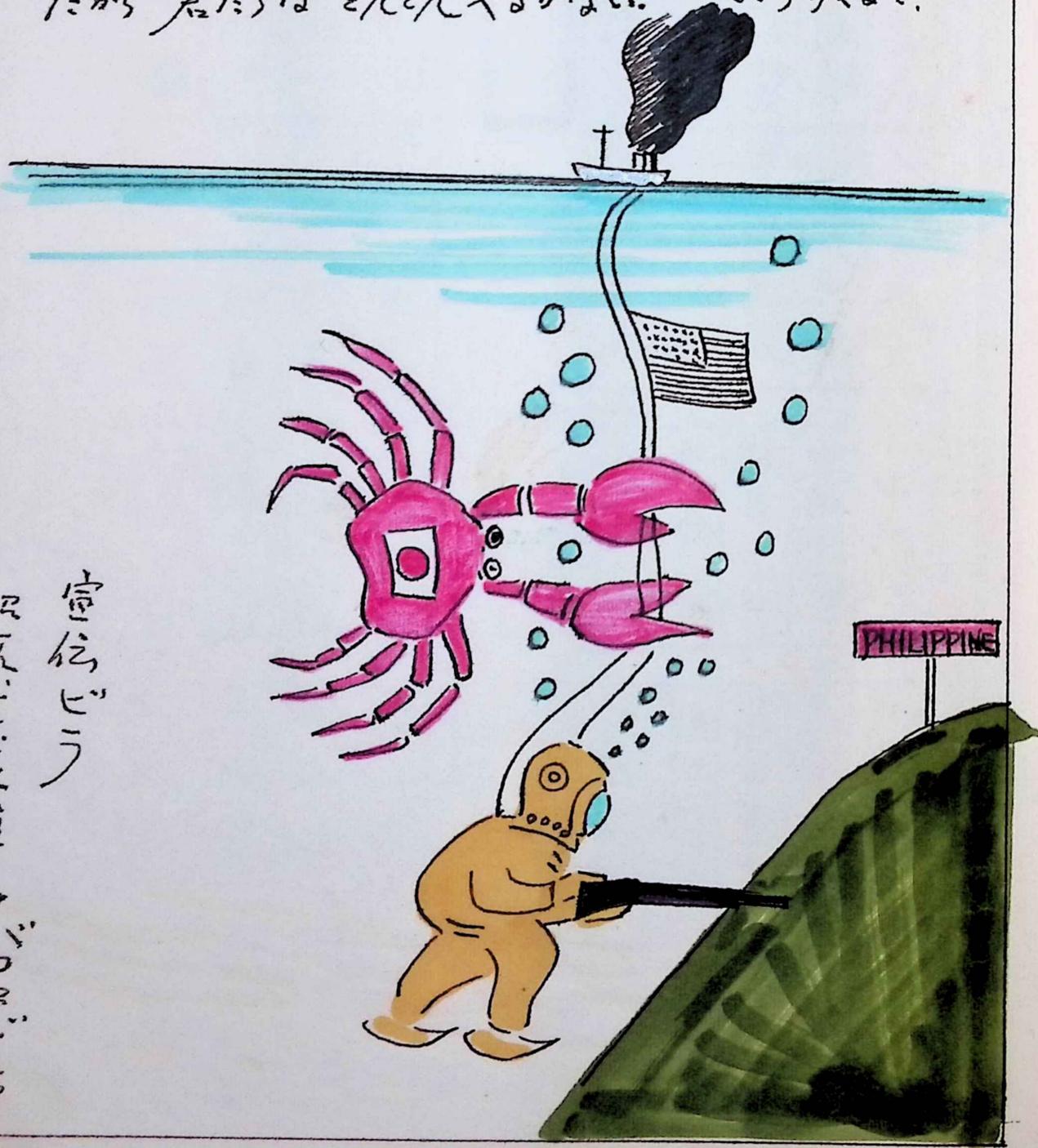
(14)

You're a long way from home. Boys in hostile territory. But don't worry boys. Your lives are not immediate danger. Why? Because we'll not bother with you small fry. It's much simpler isolate you by cutting your life line. So fire away, boys to your heart content.

Syw. 19. 11. 17.

(訳)

君たちはふるさとを遠く離れている。敵対する地域の若者よ。しかし、君たちは惱まなくていい。君らの生命は直接の危険にさらされているわけではないのだから。君たちの生命線を断って孤立させることはたいへん簡単なことなのだ。だから君たちはどんどんやるかよい。ころゆくまで。



宣伝ビラ  
昭和三十七年  
バコト

Envy

As the fish that lives  
Deep in the muddy waters,  
Be my secret thoughts so hidden  
Never known to others.

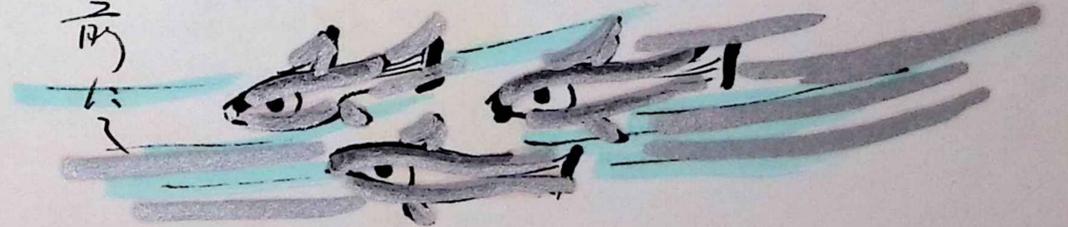
(16)

(訳) 羨望

濁り江の底に深く  
棲む魚の  
かくれし おこひ  
他人に知らずな

高知陸軍病院手術室の  
初任当時の若者  
池(今橋)子皿上等兵撮影

昭三十九. 2. 10.



獨立混成第三旅團第三工兵隊 編成表

(昭和一九五二)

- 中隊長 陸軍中尉 島本敏雄
- 第一小隊長 陸軍少尉 山上正雄
- 第二小隊長 陸軍少尉 塩谷又雄
- 第三小隊長 陸軍少尉 德久 勇

指揮班

(軍見)

曹 和手文太郎	兵 藤松高義	兵 上甲 信	上 片岡孝徳
軍 小西信一	兵 宮本島雄	上 東条 保	植田徳治
安井 賢	兵 中久保満男	福井 正典	藤田重男
長田政晴	徳弘忠美	生田 巨	三森本 晃
山中忠義	篠原秀夫	小田久義	大地福一

第一小隊

一 班	伍 富田正直	上 坂本善太郎	一 吉兼昌三郎	二 清橋安喜丸	木下義孝	松村 勇	実好三郎	山口千代志	程野傑三
二 班	兵 船田 登	上 山崎哲弘	川邊時一	井原 茂	加藤清一	本田義一	小原崇次郎	植村豊樹	浦野勝秀
三 班	兵 東武男	上 坂本太二郎	白川高義	藤田勝利	徳田十郎	妹尾寛	大中豊	岡部光次	中岡忠義
四 班	兵 下村直	上 高橋慶忠	山中政夫	梶原崇男	杉村孫一	小松忠臣	堀内正嗣	高橋 茂	森松信正

(21)

第三小队

田村善一	高田勝一	近藤勇	賀川周三郎	森本精	榎内理二	三西川小太郎	小西清	一山本助一	吉本正敏	上塩崎兼吉	兵松尾虎行	伍東条貞男	一班
松浦義夫	藤原富太郎	安岡進	三原順吉	藤田行雄	二西尾佳次郎	楠野福富	一堀田八郎	中島茂理衛	合田政一	上香川進	兵井上之雄	伍井手剛	二班
小野慶太郎	秋山富久	平井徳一	山下政雄	三石光雄	藤本武久	藤原豊彦	一藤田秋吉	森岡英則	鈴木巧	上杉本末喜	兵富田房喜	兵上野重太郎	三班
三木邦久	藤原章	宮崎初行	坂本善平	太田照夫	河野君雄	二樋口利光	一田戸竹正	竹本龍松	新田唯一	上新家富雄	兵山口正八	伍角田忠	四班

第二小队

(20)

森忠治	赤瀬芳敷	田中敏春	西森廣治	吉田茂	渡邊勝安	三好貞一	三田中萬治	勝瀬正	一堅田清作	上伊藤都築	兵溪栄吉	伍谷中繁富	一班
都築伸	石原誠臣	大西寿	新地等	中川一行	二田中繁信	三池田昌稔	一森上貞一	松友勇	永井栄吉	上永峯行雄	村上稔	兵藤井良信	二班
安永恵	鉄野毅吉	丸山義之	山口嘉治郎	松崎良吉	長倉与太郎	二番西嘉太郎	一安田則和	藤川喜一	坂口治	上田川勇	森川信義	兵井上常助	三班
黒田悟	松下金七	竹崎有一	味代木勲一	木内寛一	池本和躬	二高宮登	一池田憲二	一山田豊一	高山太	上安藤竹正	兵野中盛吉	伍堀内真輝治	四班

一 闘い

昭和十九年五月八日 秘命令

一、陸軍衛生伍長

藤松高義

獨立混成第三十一旅団第三工兵隊に轉属ヲ命ズ

依テ五月十日一ニ、ロロ道ニ西部第三十七部隊本部ニ到

着スベシ。

行く方は

幾千海里 みいくさの

海に雄々しく 船は いま残つ。

昭和十九年五月十三日、獨立混成第三十一旅団第三工兵隊を乗せた「うすり丸」は朝霧の深く閉じた門司を出港した。堂々の船団は、とす黒く荒れ狂う魔の海峡

バシーの潮を蹴って一路南へ進下、五月十八日に比律賓ルソン島・マニラに入港した。折々悪しく、赤痢発生に伴う防疫のため余儀なく一週間の上陸禁止を命ぜらる。中隊は、五月二十六日、マニラ上陸、翌二十七日マニラ出港、二十九日セブ島セブ上陸、セブ出港とはやくもあわただしい行程を経て、マクタン島に上陸、ホマエホマエ空港の設営に着手したのである。

六月十六日、事態の急に応じて、中隊リ島本隊はこの島オポンを離れ、六月十八日にビサヤ地区と呼ばれるネグロス島西ネグロス州バコロドに上陸、市の東南に位置するハイスクリル前に移し、バコロド飛行場の設営に努めることとなった。

十九年七月十日、師団改編に伴ない島本隊は、第百二師団工兵隊第十中隊へ通稱第一〇六九七部隊島本隊と

19.7.21 マンパで戦死  
 川口時一 愛媛、東守和 玉野村  
 岡田光有 徳島市佐古町 左季助部管通(佐利) 19.7.21.  
 都築 伸 戦死。

(24)

改められた。

これと同時にわたしはセブ島セブ市の師団本部へ独りで移らねばならなかった。その頃、原因不明の高熱に苦しんでいる養宗吉兵長を見捨ててゆくのは実に思ひがたいことであつたか、命令と名付けられた権威に背ける禁はなかつた。

転属していったセブ島の師団本部勤務は多忙で、わたしは白石伍長もといひ連日連夜の事務処理に参つてしまつた。

或る夜、おそく寢室へ戻つていつたわたしは、不意にス島の島本隊よりの電文報告に接し、衝撃あまり啞然となつたのである。それは赤髭の川口、気転の利く岡部の死、そして都築二等兵の愛傷の旨を知らせるものであつた。多分敗逃に転じたものと察せられるか一体

(25)

どうしたのであらう。勇躍内地を出発以来七十日余を経過したばかりの今、早くも戦死しようとは。

中隊衛生部員の車条や三木たちも随分まごつていふことだらう。養兵長の経過や転帰は？とかくの思ひが憶測となり、さらに具体化した想像に発展してなかなか寝つかれないばかりか、バコロドの中隊がなつかしく恋いしくさえ思われなつた。

この夜、椰子の木で相手を求める一対の蜚場を空越しに是かけた。南の果てにいま聞くか、島 哀小切なく千々に乱れつ。と、いつか書き留めた日記の中のかつこ島は、まわれもなくグロテスクな蜚場の雄叫びであつた、と確認したのだ。

数日後、剣の如く軍医部へ出務したわたしは重大な情報と耳にした。当時この師団管下の工兵隊十個中隊は、

セブ・パナイ・ミンダナオ等の島々に分散して、その水が  
 れ激しい労務に従っていたのだ。なにしろ西島瘧疾の地  
 であるだけに原因不明の熱発患者が続発している状況だ  
 った。だから衛生下士官を管下の中隊から吸い上げてし  
 まった師団本部や軍医部は、それへの対策を請いない訳  
 にはいかなかったのだ。

結核系中隊から召集した隊付衛生下士官のわれわれも  
 原隊へ返して隊付勤務をとらせることに決定したらしい。  
 待望のその日か遂に訪れた。八中隊中西、九中隊白石  
 として十中隊のわたしの三人は、機帆船に便乗してな  
 かしのバコロドの中隊に舞い戻ってきた。  
 バコロドの街々は昔に愛わらぬ平和な賑わいの中に明  
 け暮れしていたが、八月十五日、はやくも陣地構築の秘  
 命を受けた中隊主力は、人里離れたギンバラオン地区へ

進出しなければならなかった。

丁度その頃、徳久少尉指揮下の一區隊は、バコロド飛  
 行場の滑走路作りのための薬石採取のため、ドリサイ東  
 方約七キロの地点マタパンで作業を続けていた。

わたしは健康益整理と薬物調査の目的をもってマタパ  
 ン却落へ赴いたことがあった。

緑したたる草原を快走する機関車に身を委ねて行った  
 マタパンのあの日は、いまにして想えば全く悲しい思い  
 出になってしまった。

その日の夕方、用務を完了したわたしは、まず谷中伍  
 長と桑伍長を訪ねた。バコロドの休養室で長い間わたし  
 も手ごずらせた後は、病いえてかなり調子つき、もう炊事  
 勤務などやっていた。年若く、黒様なアクセントもち  
 眼の底に冷徹さを感え、そのくせ親しみも感じせる中西

伍長は同じ理役であり、しみじみ人の好きをいつ後や三好たちの分隊長でもあった関係で、門司出港以来の話し友達であった。

その夜（八月ニナ一日）わたしは谷中分隊に一泊を乞い、衛兵下番の田中萬治の好意に甘入る床についた。

田中とわたしは狭苦しい分隊の宿舎の一隅で一枚の毛布にくるまり、眠れぬままに、おたかひの環境や性格、

彼が今日はじめ受けたとったという内地よりの便りや、子供さんの写真などについて語り合ったのだ。

わたしは彼を識り、彼がわたしを知ったのは、水かきっかけであった。そして、その後は「萬治」と呼び、「

班長」と呼び文い、単なる階級的な間隔や職能の不調和を越えて、感応的な了解のなかに深く結ばれていくことになるか不思議な縁縁とでいいうほかはない。

昭和十九年九月十三日、米空軍敢行、初のバコロド空襲襲撃以来、わたしたち工兵隊は死物狂いの復旧作業に余念なく、わたしは中隊患者の処置、薬物収集、書類調整に忙殺さる傍、中隊の作業現場を巡視すべき任務もこらっていた。

「大君の邊に、いそいで死なぬますらおの、誇よきよ、極まりなけ水い。當時は曜日はおろか、日目の確認さえおぼつかしいほどに、連日連夜の猛作業が続けられていった。爆撃によって穿かれた滑走路の弾痕は、赤茶けた畷休も天空に曝し、埋めても埋めても、新たな空洞がえぐりかしてしまうのだ。

バコロド郊外の夜更け、大きい椰子林に隣接する飛行基地で、兵士たちは各自の任務に外れてはお止まずの決意を胸の奥に、黙々と内匙（スコップ）を使い土を盛

る。ふるさとを遠く隔てて異国の果てに闘うことしう半  
年、ふたたび祖国に相まみえることを得るし得ざるしこ  
の一戦なのだ。

その夜は十六夜 明るい月が丸く煌々と滑走路やエア  
ロン帯の残墟に光を返っているバコロドの飛行場。

「小休止」の伝達を耳にするや否や、所がまわず、ごろ  
つと土に寝転ぶ兵士の疲労は何を以てして表現するこ  
とは出来ないであろう。

残り少ないハ統(煙草)を分け合い喫い合いなから、  
つかれを示す重々しげなだみ声で話し合ふことは、いつ  
も海の彼方のふるさと、親のこと、子のこと、妻のこと  
であった。

南の磯に今宵は柳子葉敷き  
月の光に染みて眠らん。と詠むわたし

の巻に

「あ、思いつきり眠ってみたいなあ」と、吐息づく兵隊たちの気持ちは偽らない告白であるのだ。それはまた無理からぬわたしたちの切なる願望でもあるのだ。と、突然対空監視所から

「西方向 爆音」と音が上がる。竹本兵長の怒りである。敵機の来襲だ。辺りのおわめきはたと止む。そして息詰まる沈黙の中に、聴こえてくる細い蟬のすだま。その虫のすだまに連なっていて何が不気味な唸りが聞こえてくる。全身の緊張を一か所に集めて探ると、月光にぼやける星座の中から、渡り鳥の一群らしいものか通

過していく。彼神経と聴神経が支える大空の局部は黒々とその姿を太めながら真直面に突っ込んでくも敵機の群れ。胴体へくつきりと月光を返している。

「あつ、重爆だ。」

「全員退避。」

一際、海高い伝令の叫びに、先を争って分散する作業隊。巨大なマンゴ樹の影にしゃかんで聞く上空の音波。それは、ウウン、ウウン、ウウンと肌寒い深夜の上空の流えを切って、あたかも故郷の晩秋によく耳にした股穀機の騒音を連想させるようなその音波は、いや音波のみなしとは全員の注視の的となったが、突如としてその機首もギラリと瞳みつけるかのように光らせた。

「おい、残リコンソリーだろ。」

右横にいる中島の耳元にわたしかささやいた時、漆黒の線が視野に入った。

「落としたぞ。伏せろっ。」

再び中島に小声で伝えたとき、はじめて無気味を感じた。

じた。

轟然たる音を放って炸裂する投下爆弾。

ヒューン、バラバラッと小石や土塊が散乱する。

全く凄まじい速さである。しかしこの夜は奇蹟にも中隊には誰一人負傷者さえ出なかった。

わたしたちは翌日もまたその翌日も、同じ場所と同じ作業を繰り返さなければならなかった。こうして命を目的に働く滅私奉公の昭和十九年の夜と昼をわいわいはどうにか生き抜いて来たのである。

三 正月

そしてここに輝やかしい新年の朝を迎えた。一時から厳粛な皇居遥拝の式典が挙行された。

満々と水を湛えるお濠に宇す松の翠。遙かに押かむ祖国の宮城は崇高そのものであった。

さやかな朝の大きをつんざいて、聖寿の万才三唱、  
 してその後、今は之を戦友の霊に託して、鉄剣術の動作、  
 引き続き、新卒の宴が張られる筈である。  
 指揮班のわなしたちは中隊長の相伴であったか、雑沓  
 は何れ月も前から期待していた兵隊の心も裏切つたよ  
 うである。常夏の氣象条件もあり、比律賓産の米は正  
 月気分も満喫は出来まい。  
 ビールやウチスキーの混ぜ飲みでかなり録野したわた  
 しは、朝っぱらから医務室の寢台に蚊帳を張って横にな  
 った。  
 「昨年は苦難の年であった。今年は怨敵米英連滅の年だ  
 ある。而うして撃ちてしまえ。突いて突いて突きまく  
 れ。終わろっ。」  
 さきほどの中隊長の年頭訓示を春高らかに真似て、何

か最近の要求不満を和らげ、失いかけている自分自身も  
 持ちなおしたようでもある。が、なぜか中国忠義の件が  
 胸中に去来して落ちつけない。  
 つと、起き上がったて書棚をまさぐると、昨夜書きまぐ  
 った日記の一通がそこにあった。  
 十九年 十二月 三十一日  
 晴れ 三十三度半  
 シライ六敏地区司令部、三三九自動車隊、バコロド患  
 者療養所、連隊本部などへ連絡をつけたのち、バコロド  
 へ戻る。帰途ノースアメリカに遭う。例の低空銃撃なり。  
 昭和十九年は実に多事多端の年なりしに遂に去りゆく。  
 かえりみす小ば、感情は支支湯き動く。西部三十四部隊  
 医務室付き、高知陸軍病院付き、内務班長、外科病室、  
 手術室付き、比律賓出勤など実に多忙なりき。それどこ

の心とせは或る意味にては一大飛躍の計としようべし。去りて暫く昭和十九年よ。さらば。この計を送るにあたり、若いにし世に、今は七き文上に層二層の老を衣をつくしたいと思う。——バコロド医務室に。この記事を読みなおして、わたしは鉛筆を握った。そしてこの日記記事の終わりは「孤」を付して（恐らく精神的に）書き加えた。

酒の精による全身の倦怠と瀾濁<sup>えたく</sup>がわたし自身の決意の緊張に占有されたとき、巨大な歯車の噛み合わせによって、わたしは急ピッチで正堂に回復してしまった。午前十時は外出許可の時刻である。階上階下に騒然としたどよめきが起り、しばらくそれは続く。  
 「班長殿」 医務室の扉のあすうで威勢のいい声の間へえる。多分 三奴と田中であろう。

「誰か 入れ。」 わたしの声に反応して、  
 「田中、参りましたい。」 三奴、入ります。「と正装した両名が入ってくる。  
 「二人は何を示し合っているらしい。微笑を殺し合う」とに困惑しているようだ。  
 「外出しませんか。」  
 「誘いにまいました。」  
 「二人の眼にある殺しさがわたしを誘惑する。」  
 「今夜二十四時まで外出許可はとっている。おまえたちは日夕と呼びださう。早く出て早く帰ってくるんだな。わたしの言葉に二人は逆手を取ら小た態で面喰ってしまふ。」  
 「変な場所には入るなよ。金は持っているか。少し呉れてやってほしいぞ。」

中国忠義 19.12.4 サラビアにて受傷 弾破穴と報告  
 左乳部 左肩下部 爆弾破穴と報告  
 シライ分室を侵して 同日 死者 20.1.1 死七 (シライ分室)  
 死者 20.2. 火葬に付す。

(39)

に酒の酌はおさまっていた。  
 医務室にもどって水剤の調合を始める。入口の扉を叩く音がする。  
 「誰か。入れい。元氣よく、さうから君を掛けると、  
 「現長殿、大変です」と扉があく。見れば徳田だ。  
 「もう駄目なのか、中国は……」機を制したわたしの  
 問には応えないで、固く握った拳で眼のあたりを、こ  
 すった。彼を悲しく見据えるわたしの眼に、ぶるぶる引  
 き付けられるかのようにふるえる両肩の動きが痛ましかった。  
 彼はシライの患者療養所で大腿骨折を加療中の青野患  
 者の付き添いを勤めている兵隊だった。  
 「よし、わかった。苦勞だった。わたしは徳田の勞  
 苦を慰めたが、中国の死をどうに聞いて、みじ人の動搖  
 もしなかった。徳田は不思議に思ったがし知れない。

(38)

「銭水としまことしつかないわたしの言葉へ、  
 「小遣いはあります。」行って来ます。  
 と、上衣の胸のあたり撫でて姿勢をつくり、わざと堅苦  
 しい敬礼をして出ていく三人だった。  
 部屋を出て、大通りのアスファルトに立ってみると、  
 他の兵隊たちも三々五々。今日ばかりは解放感に胸を漲  
 らせて出かけていく。が、正月とはいえ、ここは以津宿  
 の亜熱帯区のこと、彼等の襦袢の背はすでに汗ばんでい  
 る。その後姿を見ながら、事故なしに帰ってくればいい  
 かなどと思ったりしていると、内地での内務班長時代  
 かよみかえってくる。  
 高知の陸軍病院へ残して来た教え子たちは、その後ど  
 うなったであろうか。楽しい正月を迎えてくれていれば  
 いいか。天馳ける思いをかきねているうちに、いつのま

中岡忠兵衛の 五中隊長に属せ、和子、角田、富永、谷中の四名と共に、空襲下の国道を一路シライへと車を駆けた。谷中伍長の車上で対空監視の任に当たった。

十九年十二月四日、当時中隊主力はサエビア飛行場の補修作業にあたりついていた。この夜間作業中の爆弾による受傷であった。

中岡は左肩胛下部より第五肋間に至る骨通燐弾破片創として直ちにバコロド患者療養所に送られた。お村岡の運転したわたしの乗車した。途中何處か候選の草まを許えわたしも困らせたか、このとき 脾臓の損傷による内出血を思わせるのであった。

果たせるかな、わたしの予想通り、脾臓の損傷が確認された。慢性脚氣の病歴をもつ彼であったか、ことごとくに至つては脾臓摘出を免れることはひきなかつた。

空襲への灯火管制下であるため手術は翌日五日朝に持ち越された。その手術の予後は、当初は信じられないほどに好調な経過をたどっていたが、入院三週間が経過する破目になったのだ。これは付添看護人の任務怠慢に原因の一つであった。

夜間爆撃機の不気味な低空飛行に怖れをなした看護人が患者をそこに残して逃したまま、防空壕の中で夜を明かすことを繰り返していたのである。

南の国、フリッピンは昼夜の気温のひらきが大きい。こんな時、中岡はひどく風邪を引き込んだらしい。看護人はあつたしに戸を閉ざれど、その不誠実を語られたか、これを機に、患者、中岡に賦子された。身体自然の良能は急カーブを描いて喰ばまれていったのである。

風邪は高熱をよび、創部は化膿し、持続する高熱のため

め、さらに胸膜、腹膜へまで炎症をきたらし、ついに創口から汚物を度々上げることになり、哀小、中周は痛ましい重傷を惹起してしまつたのだ。これはや施す術はなかつた。

あらたに交代派遣をせよと、中周には同中兵黒田煥が肩病に付き添つた。ク口、ク口と氣易く名指ししながら、黒田に散髪を依頼したり、所持品の整理をさせたりしたのだつた。

わたしには、中周の病床経過そのものが、ネグロス傷駐留友軍の宿命としか考えられなくなつていった。いついなく硬直した所持品で、西岡軍医と私は、中周の食餌に肉して意見を文面合つた。了解がつくまひにたつぷり四十分を要してゐた。このかで空襲警報のサイレンが唸つてゐる。ええと振

りにわたしの気分は優れてゐた。九号病棟よりの階級を駆けおろるとき、精神病患者らしい人の奇声を背後に受けた。わたしは意識的に胸を張り、俺はまた狂いはしないぞいと独りごちた。

中庭を抜け、衛兵司令に確実な掌手の礼も返して回道一号線に出た。ええと振りこぼる友軍の司値機が一ツ、カニラオンの方角さして飛んでいった。こころなしか両翼の日の丸が眼に沁みるほどに赤かつた。

明くれは元日、中周に捧げる餅と味噌は、すでに前日看護人黒田の手元まで届いてゐるはずであつた。平生、死んでしいから甘い味噌汁の雑煮餅を腹の裂けるほど食つてみたいと言つてゐた中周であつた。

療養所で中周は、黒田の調理した雑煮餅を、うまい、うまいと感度の舌鼓を打つて食つたとのことである。軍

「医とわたしの二人で考え抜いた安楽死の手筈のしのである。ううことは、本人も黒田も密知るはずはなかった。」

前述の通り、元日正午近く中岡の危篤が伝えられた。中岡の小室目指して、まずわたしが真っ先に駆けつけ入口の扉を押すと、付き添いの黒田一等兵が

「班長殿、すしおどかしたです」と首垂れた。  
「そうか、残念だ、済まなかった。」

わたしは黒田に謝ったが、それはそのまま中岡の口頭の人懐けに対する敬意を卒直に、黒田に洩らした以外のならなかった。わたしたちの到着は、七八分遅かったらしい。

「中岡も惜しかっただろう。何が言っていたか」と黒田を振り返ったわたしは、彼の眼のあたりが赤く腫れあがっていることに気付いた。

わたしたちは中岡の霊に捧ぐて深い祈りとともに心からなる合掌をした。

「中岡は自分で死ぬことを予期していたようですよ。中岡の皆さんはよろしくとのことでした。」

黒田は悲しみをくくそう涙らした。

中岡の両の手を確実に組み合わせてやると、耐えがたい孤独と絶望感がわたしの脳裡に渦巻いた。

「気の毒なことだ。家内や子供をこつ男がよく死ぬる。中岡はいい男だった。」若いならぬいぢをやつと綴り合ませながら愚痴をこぼすにはいら小なかつた。

後からやつときた和手曹長以下、下士官たちも水を水悲嘆にくく、いまは暮霊と化した中岡の枕辺に押いた。

全く空しい気持ちだった。遺留品の整理をすませたら

中隊へ戻ってくるように念を押して帰途についた。  
中国は今年の十月には、この戦争が終ると断言した  
そうですが、正月早々こんな思いをするとは、今更にはま  
つと忙しい嫌な年ですよ。

和手曹長はそう言ったか、バコにド兵舎へ帰っていつ  
たのは、あたりを彩っていた夕焼けの色褪せた二十時す  
ぎであった。

三 勤務

明けて一月二日、中国の病歴書と死之調書調製の件で  
ニライの療養所分室を訪ねて行ったわたしは、その日も  
夕方近くになって帰って来た。

日没になってし気温は下らず、夜になると気になって  
いた雨がぱらついて来た。

わたしたちの車か、第一号ハイウエイから左へ急カー

本内はわたしの  
言葉をしてきた

ブすると、中国を火葬に付す火が高く天に沖して美しく  
った。その向う遙かな彼方で、事に動かないカンラオン  
山の輪郭が、うす墨の夜空を截っていた。

わたしの命令によつて火葬も済ませた本内が、医務室に  
とどつて来たとき、わたしは心身の疲労もあってか完全  
に伸びていた。ベッドに俯つ伏せになっていた。

ひとたび絶望的な不安が本内の脳裡を掠めたか、近づ  
いてわたしのふれ、わたしが息づいている確証を掴んだ  
のである。

わたしの右手に、白墨が二つに折れたまま握られてお  
った。

朝霧は 雨としなりぬ カンラオン  
ふしと静かに 人焼く けむり

わたしがたむける中国への挽歌であった。

本内は、はじめ、読みなく板黒の文字を音読していたが、声がつまり、あとの句が結ばなかった。嗚咽を噛みこらえながら、物入水のマツチを棚にのせ、遂にこみ上げてくる情念に堪えられず、いきなり駆け寄り、私の背にしかみついて慟哭した。

中岡の骨拾いが終わって数日経過した頃、中隊は空襲の危険を避けて、バコロド市内の奥まった東地区へ移転するはめになった。

一月も中旬に入ると、中隊主力は偵察と三期敗匪掃正討伐をかねて、ギンバラオン地区への出動を迫られた。当時、中隊の一部は連合軍の上陸に備え、橋梁破壊の任務を以つてバゴに派遣され、また一部は石渡工場で工具の製作にあたりついていた。こうした分散かちの中隊全隊に亘つての衛生部活動は、その運行上になにかの障碍を伴

う、と、か多くわたしの悩みでもあった。

移動準備に追いまわされ、あわただしい数日か六のようには過ぎ、いよいよ出発を明日に控えた一月十三日、蒸せかえる熱気の煩らわしさは耐えかね、床に転がった。

椰子の葉末に埃かる紺碧の空を見つめながら、やがてまたるべき時機に及する心構えを思つたりしていると、階下の黒板に書き付けていた河野の落書、すなわち、

——人生は仮の宿なり、生を望まず、死を望まず、時然に順い、人の道を尽くすのみ——を思い出した。

哲學的な、仏教思想によるものらしいが、河野君雄とは何をしていた人間なのか、そしてその真意は……などと深く憶いもめくらせたりしてみた。

眺めやる空のあすらば、ほいよ、大まきの白雲かゆつたりと流小、階級社会の規格や真理人情などにしばられ

\* 長伍衛生隊 佐賀 山口  
紫 小 宿 宿  
紫 小 宿 宿  
叔 妹 叔 妹

\* 東条保 坂出市高屋町

( 50 )

なから回転せしめたりといふ人間、そして自分自身にいやな幻滅を思ったりするのだった。それは、宇宙の中に、微分子的な存在を占める人間と、巨大な星々、そして巧まざる神秘を包蔵した宇宙との対比にほあるのだ。その翌日、ひとまず中隊主力と共に、ギンバラオンへ移っていったわたしは、調査の用件でシライ駐留の三三丸自動車隊の山口伍長を訪ねていった。

豊かな人間性と共に流れた頭悩めし主として、高知陸軍病軍病院當時より、わたしはひそかに注目している衛生部員であった。死傷者名簿、患者報告等の書類のつき合わせし完了して、お水われ三人は、今後の戦況の予想や、近い将来に南設されるか、知れぬ野戦病院の編成や機構について語り、病院幹部の下馬評におよび、果ては、たかにお前だ俺だのと加あつた。

両手を約して別れることになつたか、柳子の葉影の舗道で、かちつと編上靴の踵を合わせ、無事を祈り合ふような心情を以つて、拳手の礼を交わした。

この帰りに自動車の故障があり、かなりおそい時刻になつてギンバラオンへ帰つていった。

わたしの帰隊を待ち受けていた東条兵長は、この一日の中隊患者にかかわる報告をし、新しい患者、小泉の件について説明した。

この日の新患は小泉満好一等兵で、急激に熱を起し下病を始めた。余りの回数に不審をもち、隣接部隊の軍医に不時診断を依頼したところ、赤痢の病名で早速の入院を命ぜら小泉という。しかし連絡車もなく東条は頗る困惑したが、当の本人は絶対に入院などしたくないといつてゐる。また正式には病理試験は実施してないとのことである。

( 51 )

※ 和手文太郎  
 幡多郡大正町四手  
 現在行方不明  
 太郎山陣地より斬込隊長として出陣せし  
 死と確認なし  
 家族はフリビンのサンカロス川に生きている  
 と信じている。  
 20.7.20.  
 マングラガンにて戦死となつてい

( 5 )

「よし、わかつた」とわたしは言ったが、少し迷倒めんたうなこ  
 とになるかしら思ひなかつた。  
 「そいつは御苦労だった。俺も小泉のところへ行つて検  
 べてみよう。」

東条をねぎらつて自分の室にかえし、将校宿舎に中隊  
 長を訪ねた。一日の事情を報告し、和手曹長の宿舎に足  
 を運び、シライで兵長から母にした代用衛生兵選定  
 の件を話してみた。彼は、明日かはや姫堂武か、と、あわ  
 てふためいごとび出して行った。中隊長に話に行つた  
 らしい。

多岐な中隊全般の庶務を司る和手曹長は、一見してそ  
 の顔や姿に連日の過労もうかかひ知ることか出来た。  
 結核中隊長、人事係とわたしの三人で相談し、新地等

一等兵を選抜した。

毎若く、健康で、中学校出身であること、人柄なども  
 考え割合早く白羽の矢も立てた訣である。

新地を呼び、事情を説明し、早速そこで快諾し得るこ  
 とかできた。明朝出発の指示などしている時、夜は十時  
 をまわっていた。

兵舎へ入つていくと早くも眠りについた兵隊たちの寝  
 息が聞こえる。

小泉は、案内の兵隊にかけるほどの余裕ももつて  
 会釈した。病理試験の結果は、真性赤痢とは受けとれず  
 わたしは単なる急性腸炎として診こいた。

「小泉、気分はどうだ。」

「やや緊張した彼は、」

「はい、だるいのは、だるいですが……と手探みの仕草

「入院は嫌いだって言ったな」  
少し語勢が強かったが小糸はこの間いば、さうと引いた血の気を悟ってか。

「はあ……でけることなら……」と一言を吐きつけて口ごもるのだった。

病室はいまのところ詰まっておろし、餘り思く、全体として療養に満足を得られない状況も誰かに聞かされてくるかも知れない。しかし、入院も極度に拒否している理由は、それより他にあるのである。

すでに、パラソンやマキンの島を玉砕しており、シイテヤタクはバンも奪取されてしまった。米英連合軍はなおも近隣の島嶼を抑え、このネグロス島に加入する連日連夜の空襲も、やがて近日の上陸を企図しているだろう。小糸も同じ人の子。人である。同じ厭土を踏むなら大

張る半生気心のわかつた戦友たちと行動を共にしたいのである。

「そうか、わかつている。あす俺は新地を連れ小こバゴにトの療養所へ行く。十中八九大丈夫とは思うが、明日の朝経過が悪ければ入院だ。その代わり今夜薬を調合してみるから服薬の時刻と回数をよく守ってくれ。便もしう一度検べてみよう。

「時刻、あすに備へて連絡してあったか。その車が車庫前に掘えら小こもいるのを破めた。その時、不吉な予感のわたしの胸をよぎった。

指揮班前の、青木まかいの大樹には、無慮数千数方をおもわせる雲の大群が怪しいまでにギラギラと光芒を放ち全く昼をあざむくかの光景であった。

濁り江の草の褥に生まれだ雲のつらなりは、五分にも

満たぬ小さな昆虫でありながら、おのれの情念を全身に燃やし、行為に光りを放って飛翔する虫なのだ。

正しく強く生を抜いていきたい。人命をあずかり、その生死を何小にも助長しよう。権限を与えられて、自分の重責と、そのあたしに迫る内外の悪鬼おのれの跋扈に對する任務が、あたしの自身を構成する知、情、意の間隙を縫って、ネオンサインの五色の光線のごとくに文錯してくる。

睡眠不足の憂鬱と、蠟燭のたよりで確認した小泉の予後が快方に向かつている喜びとで、均齊を保っているわたしであつたか、翌朝、始業式開始にやや間のある入時半ごろ、わたしは患者療養所の庭園で新池に語つた。

今日はお前の晴水の門出だ。衛生部員の仕事は、俺や東条、勝瀬、三木の仕事を覚えて知つていようか、誘へ

でその文字の如し、つまり人の生命を備へる活動だ。そのいとなみは、たとえ愈しく誠心誠意務めれば人を救えるかというところではない。技術の面が介入してくるんだ。とにかく人後に落ちない様に終始敬請するんだ。

今日は式典で講和だけだろうけど、本格的な教育計画は明日から軌道に乗せるんだらう。教育期間は短い。しかし覚える量は少なくとしつかり肚にいれ、実地実物に即して呑み込ませようにな。どこまでも自主的に、自信のある、信頼される衛生兵になるように修業するんだ。

衛生部の教育は、殊の外、軍紀がきびしい。そして病院関係は内務がきつい。これは兵科の教練で培う気概を内務だけに縛つて養成しようという詭だ。

つぎは体力向上だ。大体衛生部員は白哲で、俗にヨイチンと呼ばれるが、人の二倍も三倍もの体力や精神力が

なげれば、場に臨んで自分を發揮することは必ずかしい。教育期間中の体操や銃剣、短剣術はもちろし、銃定や水摩操に至るまで体力強化のためだと思つて真剣に積極的になつてほしい。それから内面の苦惱処理の問題だ。悩みごとや心配があれば記憶すべき事項も覚えられないのだ。内務班長の教育助教だつていい、話しやすい人に打ち明けて相談に乗つてもらうんだな。

俺もこつちへ来た時は立ち高るが、連絡事項はバコロド残留の生田上等兵に頼むようにしてくれ。俺から生田に言つておくからね。じゃあ、頑強れよ。

体験から割り出して語る先輩の言ひ、瞳をしばたいて聞いていた新地は、踵を返さうとするわたしの横顔へ、さつと右手も挙げて敬礼した。きりりと引きしめた唇が気のせいか、やや震えてゐるようでもあった。カチツと

かがとも合わせて、指先に寸分の隙もない彼の敬礼は、まるで幼年学校の上級生の心のように美事なフオームであった。

療養所から約十分、ひとまず残留隊の居所で涼をとつたわたしは、午後水野隊の軍医を訪ね、現地自生の薬草について多くの話を聞き、昏れ近く、またギンバラオンさして帰つていった。

ナガ飛行場入口に空高くそびえた柳子樹に攀まじ登つていく老翁の全身が、ヒサヤ海より映えてくる夕焼けの燕脂色に染まつて見える時刻であった。

四 決心

ギンバラオンへもどつてくると、中隊内部が騒然と乱れていた。昨日に引き続き小泉を思ひ来たらしい。格別診断に来た訳ではないか、どのような小泉が処理されて

いるかを確かめに見えたようである。Y部隊の軍医かはなはだしく職権を乱用したのである。つまり、小泉も入隊させてないかどにより、中隊長や指揮班の下士官たちには荒々しく異言を吐き捨てる帰っていったというのである。無謀な言動をとった軍医に対し、心中ひそかに誹謗しながら下士官や兵隊等は、その源をたかのぼって衛生下士官の言動に期待をよせているらしい。

「鬼軍医ですよ」

「どうしますか」

「貴様の隊の下士官をとつすめてやる。すぐよこせとか言っていますよ」

なやと兵隊たちの反撲的言聲がわたしに同情する。中隊に平和をもたらすために、わたしが主張を曲げ、一方的に自己の主張を押しつけてせよとするかの軍医

の命に従属するか、それとも、わたしの主張を述べ、かの軍医の主張を蹴えさせるか、思案の余地はいずれにも拡大される。しかし、度外に入らずんば度外を得ず。それもまた急ぐにしくはない。双方の間隔は幾千幾万の線が引かれようか、二点を結ぶ最短の距離は、ただ一本の直線しかあり得ないのだ。

わたしは一つの決意を以って、地区の高級軍医X氏を訪ねていった。

「貴本隊の衛生部員ですか小泉患者の件で伺いました。挨拶をしたものの、わたしのシヤツの下の鼓動は高鳴り、単純に鎮まりそうになかった。

歳しくうな顔貌を一度、こちらに向け彼は「うん」としゃくった顎を、もう一度直して、

「入隊させろだったのになぜ入隊させないのか。」

と、早速説明を迫る。

無闇に発言して、この高級軍医を逆上させれば、いも残す発火点になりそうだ。一対一で正當な主従関係の保てぬ事例の多い軍隊社会である。

「入院は命令だ、水を避けるのには実があるのか。」

最後の止めの一しりであるか、知れない。命令、命令と威丈高になつてゐるか、何か命令であろう。景徳すれば、白らの腰の着鏡に火を吐かせ、この美事なりノ

リユーに拭きの床の間に、威嚴偽装のたくわえ隠しと、巨大な体をぶっつけねばならぬ破目になるか、知れないぞ。

窮鼠猫も囓むという言葉もあるが、わたしも確信の持ち合わせがない訳ではなかった。  
「口実といえば荒ら立すますので、その言葉は用いませ

んが事情でしたらあるにはあります。

まず現在の戦局ですが、連合軍の攻勢の前に日本の勝利は困難であるように思われます。マックアーサーは、すでに中部フィリピンを攻略してゐます。アメリカ第三艦隊は、現在南西諸島、台湾、ルソンを連続攻出し、アメリカ第六陸軍がルソンへ進行してゐるといふ。現住民の確かな筋からの情報も入つてゐます。昨年九月十三日以来、ネグロス各地の空襲も、その意図が奈辺にあるかは誰しも知らぬ人はないはずで、現住民の話では昨夜来この沖合で哨戒艇らしきものが出没してゐるとか、騒いでゐるようですよ。過日玉砕したサイパンの米空軍基地からはB二十九が東京へまで空襲に出向つてゐるやうではあります。臨終の際になつて、ハルゼーとかの推定に反駁して特攻機操縦士の二十六、八%を力んだつて何にな

るでしょう。敗れてしまえば賊軍。日本帝国の軍法會議  
も、憲兵司令部も自然消滅です。将校も兵と同階級にな  
ってしまいます。冗談まじりに、旅団の小隊長さんに託  
したのですが、わたしは工兵中隊は、アホ、サンフア  
ン經由で太郎山へ墓穴を掘りにゆくのです。

現在の療養所は、まるで姥捨山です。人間にも自然の  
良能があるんです。患者の傷病と、精神的創傷の治療  
のあいだへ、どの程度、軍医隊の誠意が介入したかを  
お考えになったことがあるでしょうか。

わたしは直接あなたに肉体があるとは申し上げません  
か、ここでの正義は、当然さういふも正義であるはずで  
階級はともあれ、わたしたちの社会には、一分、いっせ  
一秒のちの自分の命を保証出来ない戦いの場、特にいま  
のような段階に入れば入るほど、信義や友愛の遵守こそ

願わしい姿勢ではないかと思うんです。

わたしとこの小泉とでも、内地出発以来の親友たちと  
死生苦楽を共にしたいという願望は必死に希い続けたい  
んです。

それはそうだろう。

よくしる人になに長くしゃべらせたものだ。この間、彼  
は黙念として聞き身を立っていたようであったか、えらく  
閉っていた口を利いたのだ。そして、

「現在の症状と病理試験の結果はこうだね。  
と、やや丁寧な表現だ。」

「ゆうべ投薬し、四時間おきた服薬する様に指示し、そ  
の旨も不復番に伝えさせました。昨夜軍医隊にお伝え  
すにはよかったですか、夜も更けましたので、共礼  
しました。今朝は下痢も止まり、プルスはやや変則な

から八十四型にいたっております。口腔粘膜はやや充血、扁桃腺が若干肥大しております。熱は七度三分でした。病理試験はマイナスに相違ありません。自分は急性腸炎と診ておりますが、作業の疲労と寝冷えによる風邪気味しかわっていると考えております。決して、格別の他意を以っているわけではありません。決して誤解なさいませんように。」

わたしは、こう報告したか、軍医の眼の色に、やや強硬<sup>まじょう</sup>だな...との含みを覺えたとつたからである。

「よし、大分事情がわかつてきた。」と、いつて更に、  
 「入院拒否は患者だけの意志で、中隊長や他の下士官の意志の介入しているわけではないのだな。」と念を押す。  
 「勿論です。本人の意志を大切にし、目下の状況から考え、本人のためへのわたしの意志心が若干入って

いるのは事実です。この点はお許しください。」  
 両者の精神的な対立と、彼に対するわたしの緊張はかなりほぐれた。

軍医は、何處から手に入れたのか、イギリス製の煙草に、火を点けなおし、一本を手にとつてわたしにすすめるのであった。

「サンキュー」

思わず英語が出て苦笑したか、それほど不自然ではなかった。君は通訳も出来るのか。」

「はい、さうなら話せます。急に空気がすかす場所に来て、対面したときの、軍医殿とお会いしているのです。失礼しました。」

少し振りに喫<sup>す</sup>いて、高級の煙草の味はまた格別であった。わたしは煙草を吸った。

Toyoki Uemura  
 植村一徳樹 心臓中の硝子に2入定  
 19.2.21 脳振盪に2死  
 (バコロド患部瘻管所に2)

(69)

はセブ島にある百二師団軍医部の所屬になつていまして、  
 島本工兵隊での勤務を申し付けておられます。  
 昨年八月でしたか、わたしの隊の初年兵が事故で負傷  
 したことがあるました。さようにわたしは外に出まし  
 たので、隊の衛生部員が、隣接の軍医殿に診ていただく  
 ようにと、その患者を連れついったことがあるました。  
 そうしたら、患者に對して、元気がないとか、敬礼態度  
 が悪いとかで、陸分患におまじ言われたとか聞きました。  
 しかし、その患者は、事實は脳振盪による瀕死の重傷を  
 負つていたところだったので、一刻も早く、浮血がれ  
 こいの処置しなければならず、無理に入浴手洗をせと  
 らせましたか、とうとう方は駄目でした。とつても誠実な  
 三孤な男で、故国には奥さん、子供さん二人ある  
 患者でしたか、平当でも受けられ不可効力だとして

(68)

二人の吐く煙か、絡み合ひ、しみ合ひしていったか、す  
 く不自然そのないただ一つの筋になつて窓外へ出ていつ  
 た。軍医はその煙の動きを見ており、何かを思つたよう  
 であった。  
 藤松軍曹といたな。  
 はい、フジマツ・ウエステリヤ・パインなんですか、  
 重相読みです。親爺は藤松藤馬で重相も三叔積んでいま  
 す。  
 「それは愉快だし、楽しい表現だ」  
 「君の出身と所屬関係はどうなつてゐる？」  
 「出身は高知四十四連隊、現在の西部三十四部隊から陸  
 病で初年兵の教育を受け、西部軍下士官教育隊へむりや  
 り入水され、高知の陸病で内務班長や教育助教をしてい  
 ました。担当は外傷疾病と衛生法、救急法でした。現在

もう少し優しく扱って欲しかったといまも残念に思っています。それ以来、わたしは可能な限り、中隊の患者はわたし自身の判断において、処理するよう努めたといええております。」

少し度が過ぎていいるとは知りながらも、ここを先途と自分の主張を続けたが、実のところ、もう少し後へ退けな立場にならていたので。

もう少し後へ付け足して言いたいこともあったが、やや自責の念に駆られて序付かない気持ちだった。

この軍医は飛行師団の軍医として、あるいは地区の高級軍医としての格とプライドもいつ人である。それゆえにこの軍医が診断し、ひとたび病名を決定し、入院を命じた以上、後へ退けぬ立場にあることとわからぬ訳ではなかった。

蚊の侵入をさえおさる窓の網越しに緑の草原が拡がり、ドリヤンの老木の下で、白鷺を背にした水牛が、草を喰んでいた。

ナイルの流域に棲息するワニ鳥の話を出して、一時途絶えた空間を満たそうかと考えていると、しきりに何か考え込んでいた軍医は、

「それが解った。僕は、昼間ある問題が出来ていて、かなり、別件でいろいろしていた。少しやがましきで済まなかった。君は気苦労したとだろう。しかし、

君は衛生下士官だ。きのうの経緯はあるかどうか。急性腸炎の確認が出来たよかったが、ひとまず患者をこの地帯から下げてはくれないか。」

彼は、わたしに視線を凝らしていた。  
「はい。療養所に入れないことにして、どこかバコに

ドあたりで休養させましよう。入室というかたちで、わ  
たしの方で様子を見ましよう。大へんお手数をかけまし  
た。小泉もきつと喜ぶことではしよう。」

明日、午前中に小泉をギンバロン地区から移すこと  
にして、その対策を考えながら、軍医の室を出た。

中隊に戻ると同僚出身の安井軍曹が心配して、  
「どうぢや、たせよう。」と聞いてく小水だ。

「然極は双方の譲歩で事態の内務解決ということになり  
ました。」

「そうか、そ小水はよかった。簡単には、いきさうになか  
ったま、うまいこといくろうかと思つたわよ。」

わざわざ、結果を聞きに来つく小水安井軍曹は、わた  
しの話を聞き、安堵の極みで彼の兵舎の方角へ帰って  
いった。

一夜が明けると空襲のはじまうぬうちに、早朝からバ  
コロドへ向かう手筈を整えた。

森岡に車の運転を依頼し、小泉とわたし、小水から、  
わたしの当番としてついでいきたいという木内の三人が  
車上の人となった。

動揺する車の上で、小泉は雑震など私物の臭検をして  
いる。対空監視役の木内は、ときおり上空に眼をやつて  
はいるが、例によつていつもの冗談をやらかしている。

「小泉、入陸して、もしアメさんが上陸して来てつ  
かまったらどうする。」

木内は、相も愛わらず口軽で愉快者なのだ。  
「儂はこうする。」

「いつ、どこで手に入れたのだろうか。小泉の左手には  
ギラギラ光る短刀が握られており、小水で下腹を左から

右へとかき切る動作をして見せるのだった。  
 車は砂ぼこりを捲き上げながら突進していく。道中  
 にはなんの遮蔽物もなく、つねに敵機の目標になつて  
 いるナカの飛行場にさしかかった。ここは最も危険な地  
 帯としてあたりの通行者は確実に注意を払うべき場所に  
 なつていたのである。  
 幸いにして機影も爆音もなく、まず一安心というところ  
 である。

「森岡、異状なしだ。か、少しシライの連隊本部入寄  
 てくれないかい。  
 運転台へ手を掛けると、濃い眉毛の下へ、いつし精悍  
 な眼をたぎらせている森岡は、顔の下半分も黒い影に埋  
 められて、その顔もさういふ向けてうなずいた。  
 森岡と木内もマルケット(市場)へ入り、小泉を伴つて

※

Isa	1	Walo	8	Hindi	...	Han
Dilawa	2	Siyam	9	Oo	...	Alin
Tallo	3	Sampu	10	Mabuti	...	Saan
Apat	4	Ako	...	Masama	...	Sino
Lima	5	Ikaw	...	Kaliwa	...	Palam
Anim	6	Siya	...	Kanan	...	Kumstapo
Pito	7	Ito	...	Bukas	...	Kayo

( 75 )

おがずかと本部へ入つていった。  
 恒川軍医に診せるためである。  
 恒川軍医は、細く白い女のようなまきやな指先で手  
 際よく聴心器を扱ひ、打診したりして、かなり入念に診  
 察していたが、矢張り急性の腸炎であろうとのことだつ  
 た。一昨夜以来の闘いの勝敗はここに決したかの感慨で  
 ある。  
 複雑に曲がりくねつた石の階段を下つて右に折れると、  
 ここに、すこぶる殺風景なマルケットのバラックが並ん  
 でいた。  
 うす汚い手かごに、イサ、ツワ、タットに、アバット、リマ  
 などと数えながら、椰子油の揚げものを手掴みで客器へ  
 投げ入れこける図は、見た目に食欲を思わせず、かえつて  
 拒否反応をおこさせる。

しかし、こうした不潔で、不自由な生活の明け暮れを強いるのは、元を亂せば戦争であり、その罪は市民

の平和に過ぎざる権利を奪った日本軍にあるのだ。どこまで続く醜い闘いであろう。現地人の日本人観は

かなり転換期に至っていることに気付かねば、間抜け

て裏切られ、大きい馬鹿をみることになるのだ。

夕リサイを通過し、海側の椰子林をすぐ右に見る位置

で突如東訖したグラマン機のため、惨々追いまわされ、

辛うじて多刻近くになって、バコロド宿舎にたどりつく

ことができた。

小泉には室を指示し、薬物を弁え、そして食餌二分を

指示しておいた。しかしそのころ空をわに迫っていた

たそがれはすっかり、夜のとばりに包まれてしまった。

遅い夕食をすませて、床につくと、あわただしかった。

この数日の疲れがうすらぎ、えし振りに心身の爽快さもおぼえた。と、すぐ横に寝こいる木内の唄が出た。

昇る朝日の恵みを受けし

笑いそめたる梅の花。

相愛らすの名調子だ。わたしか当番にと、この木内も

要請した第一点を裏書きするに応わしいこの書である。

「一及島のさや豆が一つはしれば皆はしる。」

わたしの相の手が入って、ほんのしばしの団樂に唄い

る二人だけの世界でもある。たとえ、ささやかであろう

とし、しみじみとした安らぎを思ふ一夜であった。

二階の屋根に届かんばかりに、すすすす延びきった柳

子の葉末は、姿なく忍びよる涼風に身をゆだねて、手

はなしの、なまぬるかまの快感に満ち足りたかのように

ある。

一枚の毛布にくるまうて、二人は、しばしの静寂をす  
 びしため、

「本内、お前、吉島にいたとき結婚に失敗したと言っ  
 てたな。」

「班長、いまどうもないしたんや。」

わたしの間に本内は寝返りもせず、立ち上ったよう  
 すぎであった。

「駄目だよ。毛布を引つ張ってば、とにかく離婚したと  
 かいつたな。」

「はあ、班長には、六、七回話したわ。」

「いや何回だつていいんだ。俺は、おまえという人間が  
 とうしてどうなつたか分らない。俺はお前に感心してい  
 るよ。」

「へえ、いよいよしたんかいな。」

本内は、あいた口のふさからないような早小方である。  
 「いや、実はな。さっき、俺が十分ほどだまつていたん  
 だろ。」

「うん。」

「うんじやないよ。その俺が黙っていた時、本内も眠っ  
 ていたわけじゃないのに、何もしゃべりかけて、なかつたな。  
 平生陽気なお前がさ。」

「はあ、何んにも言わなんだ。」

「そのことか和を保つことになるんだよ。その術も心得  
 えていることを利にさだと感心しているところだよ。や  
 はり人生体験の賜なんだな。さっき黙っていたとき、俺  
 は重大な思索をしていったんだ。その思索を中傷しないで  
 時を藉し協力してくれただお前の心づかいはいいとところか  
 あると思つてね、いまさらなから告白するか、お前、

「やっぱりいいと、あるわなあ。」

「寿司もくいねえ……ですか。」

「そういやない。茶化すな。はつとこつちへ寄って、

背中も合わせて、はつと、くつついてみてくれんか。」

「こうですか。」

「そうだ。はうすこしおり上って。」

木内は何事か出来ると、わたしの要請にすばやく

動作して応じてくれるのだった。

「その姿勢ではつて、大きく深呼吸してみてくれ。」

「こうですか。」

「とつては深くだぞ。」

何のうたかいと挨拶。大きく呼吸する木内の背の動

と体のあたたかみだ。わたしは、一つの発想をしようた。

詩句を練っていたのである。



魚の目

「よし、ありがと。分った。木内、詩が完成したぞ。いいかい。言ってみるから聞いていてくれ。」

そして、海

南の、したたる緑を映す干満のまにまに

さかなは瞳を伏せて、美しい乳房を押しこんだ。

長い太陽の波長がみなをこぼれどく日

空能にめざめては、潮の灰にむかっけ化粧した

背中も合わせて、岩と語り

あるときは唾のあじも、貝を憶ったりした。

そうして、清純な愛胎を知ったとき、

さかなは、冷たい額を悲しく、うるませ

涙を、みなをこぼれぬから

美しい、うるこを

いすまい、いすまい、は、剥かしているのだ。

「どうだ、本内、もしデブストラクト（抽象的）だけど、大体わかるか。」

「全部はわかれへんわ。」

「それいいよ。詩は吾人各様の感じ方、受け入れ方があるっていいんだ。けれど、作者の意図や願いは、くんでやっつけてほしいな。さあ、もう眠ろう。」

「うん、眠たくなってきた。」

「明日は、水野隊の軍医に会い、それからプーサのドラッグストア（薬局）でスルフアミンと硫黄が塩類をみて、時間があれば例のとこへ行ってみようかな。」

わたしは本内に、明日の予定を明示しておいた。

わたしのいう例のとことは、わたしも家族同様に引き入れてくれる、今新聞地で食堂を経営しているマラタ氏の本宅のことである。わたしは何となくはなしに彼等一族

に魅かれていた。

「もうかなり夜も更けたらしい。遠くの方で「カツコーカツコー」と、文尾期の蜥蜴が互いに招び合っていた。本内とわたしは二匹の音に迷惑をこうむったか、やかに深い眠りに入ってしまった。」

わたしはさかかしている憩いの間に、彼等は、糸には怪しげな奇声を発して接近し、椰子の葉末を掻き混ぜながら激しい情を交したにすぎない。

「こうした一夜は、カンラオンの彼方へまで明け渡っていったか、わたしの生涯を通しての深い悲しみの記憶に留めらるゝであろう悲劇か、掌をかえして待ち設けていようとは、神ならぬ身の誰しか知るところではなかつた。」

五・赤い花

二十年一月二十日、早朝起床。  
 心あたりと、軽やかな小雲が、そのへりをはつきりと  
 区切つて紺碧の空に浮かんできた。  
 巻脚絨を巻き込んでいると、飛びの一機、南を指して  
 通過していった。水野隊に寄つて、所用をすませ、フラ  
 サ薬局で、スルフアミン、硫酸キニーネ、目薬、そして、  
 サルバルザン十三号等を仕入れ、兵舎に帰つていったの  
 は十時十五分であった。兵団本部と設営隊への提出書類  
 の申渡し者の月間報告を作りかけていると、爆音の耳に  
 入ってくる。重爆連機らしい。  
 連日、連夜、ほとんど一定の時刻にやってくるために  
 われわれから定期便と呼んでいるアメリカ軍の爆連機  
 である。しかし、こゝれに對しては、もう慢性気味になつ  
 ているわたしたちは、あえて問題にしてはいなかつた。

階下から、  
 「定期便八機、うち六機は南方へ飛行中、残りの二機は  
 上空旋回中。」  
 本内の声だ。叫べば異様に透る音が偵察報告としてい  
 る。  
 「今日は忙しいんだ。俺は任務遂行中、全身爆創で飛び  
 散つたって本望だ。」  
 わたしがかう怒鳴つたとき、北側に至近弾の炸裂を感  
 じた。音を立てて、ガラスが破れ、部屋の漆喰が大きく  
 天井から崩れ落ちる。今日は、かなり物騒だとは思ひ  
 なから鉄箒を走らせていると、  
 「班長、食事ひす。」  
 と、木内が昼食を持って来た。  
 「ありかとう。」と箸を取つてみたか、さほどの食欲は

Cartridge case.

ない。いつも木内かいのように、雀か啄むほどしかわたしの食は進まなかつた。

再び来襲するB29に加えて、超低空のノース・アメリカの四機、ほとんどの椰子の葉を掠めるほどに突っ込んでくる。窓も激しく揺られて一層その角度を下げたかと思うと、唸りを生じて始める機銃掃射。

カチン、カチン、カチ、カチカチ、と、無気味な音も騒々しく伴って落ちてくる薬莖。そして完成した書類の上検査にかかっているわたしの耳にザザイツと俄雨の

ようなあわたたしい騒音が入ってくる。時折り、白く鮮やかな星のマークを蹴入っていた軽爆機

かいたたび上空へ舞い上がると、一時ほつとした安堵の瞬間がある。その瞬間に一枚の爆弾とその炸裂があるのだ。またも耳にこだまする驟雨の息吹き。

あつ、至近弾だ。絶対絶命……と一つの危機を直感した刹那、万雷を木魂する炸裂音がわたしの頭の中を揺るまわし、耳の、はるか奥底で、じんじんとか細く震える。これは雑音の感覚は失せ、生ぬるい風のようなものを全身に思いながら、わたしは、何が望いものの上に打つための心たように、ぐにっつんのめった。

帯やかな五つの色彩が、たかいた溶け合っし十色になり、さらに重なってその倍数を倍り、ときまにその数も倍増し、無慮幾万かの色彩の系列が、渦巻く灰白の煙霧の中いぱつと拡がっていく。

祭り太鼓の賑やかな雑子に合わせて打ち上げらるる花火の描く孤は、行き交う人々の視線を聚めて、頭上の空を、いつそう美しく彩っていくのだ。



( 88 )

社のほとりには着飾つた善男善女の群小が絶えず、父  
と母と、そして幼な馴染みの友の顔、顔、顔が現れ水入  
くる。

出し店が客を呼ぶ、あきない人のしわが水音が、ひと  
まわ情緒を添えて群集の注意をひいてゐる。と、巨大な  
獅子が二つ、金ぴかの眼を爛々と輝かせ、その四肢  
も巧みに捌きながら、わいわいの群衆の中に馳け込ん  
でくる。

恐怖のために胸を締めつけられる思いで泣き喚く兒、  
胸の鼓動の激しさに卒倒する老婆、「お婆さん、しつかり  
と、抱きかかえるわたしの手が、そして全身が、どうし  
たというのだ、咳になる醜い老婆のように、しだいに細  
まつていく。やがて鎮守の柱に遊ぶたわむれる無心の少  
年にかえってくる。

( 89 )

森の上空から這い下つて来た朝の霧が霽れ上がると、  
愛らしい小鳥の音かし、直赤日陽光が、木々の梢に輝や  
き渡つて、どこからか春の暖かい風が吹き入ってくる。  
と、急に耳をつんざく雷鳴

おや、わしにかえつて、わたしは驚いた。爆風が外水  
たガラス戸が強くわたしに当たり、ほんのしばらくの間  
膨張蓋を起こしていだらしい。

崩れかかつた戸板などを抜け出して、わたしは真つ先  
に南側の炊事場のあたりを見た。

椰子の大木が数本折られ、その先が炎上している。煙  
か炊事場の付近に上っている。

とにかく階下に降りてみなけ水はなさない。さて、襦  
袢は、上半身裸体で執務していたわたしが、こんな場  
合でも裸で外に出るわけはいいまい。あわてて採した

襦袢シヤツをとって階段を下りながら、襦袢を見ると、一等兵の二つ星の階級章がついているではないか。木内の食器洗いに出る時、わたしの襦袢を取り違えて出たのだ。あ、木内は食器洗場に炊事場へ行ったに違いない。そこから猛烈しんげんと火焰が渦巻いている。木内の危い。

周章あわてまい、と、自分の心に言い聞かせて、裸のままに外に出た。

見ると、兵隊が二人、さうへ駆けこくる。誰であろう。どちらかの一人が泣きわめいている。どうしたとてであろう。わたしは彼等に向かつて懸命に駆けつけた。

二人は、炊事勤務の山口嘉次郎、木下義孝であった。右手と顔面におのおの箇所、重傷じゅうじやうしている。しかし、軽傷だ。

二人の傷の程度を確認すると、はじめて余程が出た。

「ほかに誰かやら水でながったか。わたしは、はじめて口を切った。」

「はい、炊事場の前で一人倒れていました。」

「なにっ、生きていたのか、死んでいたのか。」

「あわてていたので、よく見なかったであります。」

「さうか、とにかく俺が行ってみる。」

わたしは、さう言ったとき、徳之川隊長と番の井上兵衛がすっかり顔色を失って駈けて来た。

「徳田か足をやられました。出血で、その辺真っ赤です。ありかどう。すぐ行く。山口と木下は軽傷で別案ないと思う。徳田と誰かが重傷らしいので、俺はさっさと来まわす。おまえたち兩名は直ちに水野隊医務室へ行って、俺が手当をしてくれんか、と言ったと診てもらうんだ。血清注射してくれんか、と言ったと診てもらうんだ。血清注射してくれんか、と言ったと診てもらうんだ。」

「血清注射してくれんか、と言ったと診てもらうんだ。」

(92)

「けろ。」

「はい、行って来ます。」

善良な山口、木下は謝意の表明が、わたしに目礼した。そして、その同じ眼を、ひとたび上空に注いで、危陰の去ったのも見届けると、ふたたびわたしを見、向こうへ駈けて行った。

彼等二人が最後の一瞥をわたしに注いだとき、わたしはすでに徳田たちのことを考えていた。

わたしは燃えさかる椰子の樹めかけを突き進んだ。

硝煙の香が鼻をつき、地上に人間の姿はなかった。

二階へかけ上がりながら空を仰いだ。敵機の来る気配

はなかった。ネグロス晴小も思った。一兵の雲さえない

空に徳田の命をいとした。

徳田のいる部屋の前下近くにも硝煙が漂い、その奥に

(93)

にも増して、生ぐさい血のにおいが鼻先をかすめた。

徳田は部屋の中ほらで伸びていた。

だるさうに両眼は南きこぼしていったが、蒼白な顔一面

に放心の色が乗り、何の訴えもなかった。

「徳田、俺が来たぞ。しっかりするんだ。」

こういうわたしに、ほんの束の間 微笑を見せたか、右大

腿に複雑骨折をし、真紅の血潮の中で控滅した骨片がに

ぶく光っていた。

二本の巻脚絆で完全止血を試み、注射をしたが、時の

経過は、すでに彼の生命を蝕んでいた。

いかに輸血し、患部の切断をしたところで何ほどの効

果も上げ得よう、しかし一刻も争って入院させねばなら

ないのだ。

みずからのおせりを抑えて、

「生田、生田」

と、炊事係の兵隊を連呼したか、まだ空襲のありさうな  
いま、誰も姿も見せようしない。

すぐ右下に見える椰子のくすぶりが、いましほし平生  
にかえった街外水の一角に渦巻いている。何か、嵐のあ  
との静けさともい言うべきか、不気味な静寂である。

煙の周辺に意識を捉われていた私は、ついさつき兵隊  
たちのいつこいた、炊事場前に倒れていたという兵隊の  
ことには思い至った。

階殺を駆けくぐり裏側から右に折れると、そこに伸び  
て膨れ上がった体があった。

御しかた、不安がわたしの脚力を拘束する。けしきも  
大地の一点で、まるで、天空を睥睨しているかのように  
両眼をみひらいているのは、大張り小泉なのだ。

小泉の爪先から大脳に向かい、電流が貫通したかの、戦慄を感  
じた。

失意というなだれたわたしの眼に、小泉の姿態が哀れに  
クローズアップされる。白蟻のような顔面、浮腫めいた  
全身。そして、点々とした砂粒が頬のあたりにくっ付い  
ている。

実に申し訳ないことだ。赤痢の病名を付して、あの軍  
医のいう通り、バコロドの療養所にひき入れられておれば、こ  
の事態は回避出来たに違いない。昨夜、自分か此所に連  
水込んだばかりに。

懺悔の録り言を心にききながら、そつと右手を延べて  
顔面に付着した砂をとり除いてやるわたしであった。

小泉には、すでに妻があったであろうか。

ああ、病癒えて、鈴なりの柳子の実を数入るはずの、サラビアの柳子林も、もう彼には見えない。わたしは時折り作るアルコール入りのオレンジ水も、淡いノスタルジヤルを思わせるギンバウオンの風物も、死によつて一切も清算したのである。

小泉の体温は、もう高まつてはこなかった。彼の左季肋部に細かい骨片を発見したか、それは浅く、第五肋間に喰入るほどのものではなかった。多分、爆風と同時に、あるいは、それ以後に受傷したもので、創の痛みは感じなかつたであろう。小泉が蘇生するといふ奇蹟は、期待してし叶わぬ願ひであつた。死者に離れ小泉に忍びぬわたしであつたか、わたしの任務は、私情とは半に敢然と一線を劃さねばならぬのである。

とばかり、徳田十郎を入院させるのが焦眉の急である。小泉の屍室の準備は、木内は依頼した。呪うべき爆音がまた近づいて来る。依然続く恐怖の音波の中で、「生田、森岡」と絶叫すると、顔色のない生田が駆けつける。続いて木内が、

「おい、生田。徳田が重傷だ。兵隊三名と、戸板を準備してくれ。それから、療養所まで森岡に車を頼む。」

早口の依頼が終らないうちに、わたしの足は、徳田の部屋に通じる階段に近づいていった。

徳田は、まだ意識を失つてはいなかつたか、怪り切つた聖者の面持ちであつた。

ほどなく応急の担架隊として、兵隊が七名集結した。その彼等一人一人のしている緊張が、きりつと伝はれた唇の線に表明されていった。

「やあ、みんな御苦労、生田、さっそくだか、誰か三名を指揮して、徳田を車へのせてくれ。井上兵長は徳田も入段させる旨を徳之少尉に伝え、残余の人員でしつて、炊事場前の小泉を運び、本内が準備しているか俺の部屋の下の事務室へ寝かせてくれ、俺は療養所でひまどるか少し知らないか、体をきれいに拭ってやって、毛布をかけ、何か茶を飾ってやってくれ。」

ここまで指示をしたとき、ノース、アメリカ機が上空を通過した。三機だった。

車庫前で上空を仰ぐと、馬鹿に流え渡っており、一斉の空をえ止めてはいなかった。下腹が煮えかえるほどい腹立たしきも思わせる絶好の空襲日和だ。

机架で運ばれてきた徳田が、そのままの姿勢でトラツクに積載されたとき、こんどは此のシライの方角から

爆音が轟いてきた。

ノースアメリカだと直感した瞬間、  
「全員待避」の声をわたしが放った。そこへ、

「怖い、のう。」と、徳之少尉が来た。  
「はあ、もう精神的攪乱ひす」と苦笑しながら、相櫃をうつと、

「患者はそのまま置くか、壕へ入れんすかまんか」と、  
徳之少尉は心配そうである。

「残念です、徳田も駄目です。今夜が越せない状態です  
ので、このまま置きましよう。自分もここに残ります。  
もう死ぬ方が簡単でいいように思え出しました。」

わたしは、正直なところを白状した。  
「どうか、ほいたら、俺もここに残ろうか」と言い、敵機が旋回しても、わたしたち三人は、徳田のかたわらに

蒸せかえる暑さの手術室で施術を見ていたらしい兵隊  
 此、さすがに見かねたものが、室外に逃水、表情を暗く  
 して廊下に向きまわっていったのだ。  
 徳田は全く無表情で、苦痛の色も見せないままで手術  
 は終わった。リンゲル食塩水、二五〇ccと輸血も済ま  
 せた。病室に移された徳田は、言葉もなく、ひとしお蒼  
 白に見えるのだった。  
 握る腕の脈膊は、か細く、いまは杜絶えんがうであっ  
 た。  
 付き添いも本内に依頼し、こまごまと注意を残したの  
 ち、兵舎へ足を向けたが、道々、白装束の小僧を思うと  
 胸が疼くのだった。  
 悄然と辿りついた事務室は、すでに死室にうつらえて  
 あり、ほの暗い室内に点々とした灯火に照らし出された小

のままついていた。  
 二度、三度とノースアメリカの三機は、超低空で平然  
 と双翼を張り旋回しているのだ。時にわたしたちの頭上  
 でバリバリと機銃掃射をしているが、目標は、飛行場  
 しく、やかに機首は、こちらに向かなくなつた。  
 ようし、みんな出てこい。もう安全だ。  
 わたしの銅鑼声に一同は壕から這い出して来た。  
 森岡、いまのうちに出かけよう。  
 自動車の出発すると、動揺のため車上の患者が気にな  
 る。徳ス少尉も同乗しているため、いくらか救わねば  
 いはする。  
 十分後に到着した療養所では、早速、手術にとりかか  
 った。大腿切斷である。

木下真孝 龍谷大学野戦病院  
入院中 20.6.5 死去  
\* 徳田十郎 右大腿軟部火傷(弾破片刺)  
20.2.21. バコ叶療養所に死去

泉の顔、一体が神々しいまでに美しく静かだった。  
やがて、小泉の傍に坐<sup>ま</sup>つてゐるわたしの元へ、徳田の  
悲報が伝<sup>つ</sup>えら小た。彼が今夜中に、その息を引きとる、  
そして鬼籍<sup>きせき</sup>の人となる予想はしてゐた。その場に臨<sup>ま</sup>んで  
決してうろたえまいかと諦<sup>あきら</sup>めはしてゐたものの、いざ本  
下孝我から、直接、死報を受けると、心中は動揺せ  
ずにはいら小なかつた。  
徳久少尉を伴<sup>とも</sup>だちに、入院の取り消しを連絡し合ひ、  
屍体愛護<sup>し</sup>を完了したのは、南國の夜はななり暗くなつて  
いた。  
悲しくも、小泉満好、徳田十郎の霊は、名知小ぬ異國  
の赤の紅<sup>あか</sup>につつまれて、とこしえの眠りに入つてしまつ  
た。空は断腸の思い、表現さえ出来ない心境で茫然<sup>まぜん</sup>自失  
の深い物思ひに沈<sup>お</sup>みこ<sup>も</sup>つた。

そして、脆くも死人でいつた二人の顔は白いかいせも  
覆<sup>お</sup>つた時、椰子樹林のあたりでひとききをかけか鳴<sup>な</sup>  
小泉の枕<sup>まくら</sup>辺にさしてあつた赤い花びらが、音もなく三つ  
つぎつぎと白いタイルの床へ閃<sup>ひら</sup>めき落<sup>お</sup>ちていった。  
おや、突如<sup>とつぜん</sup>、ひとつの好奇心か、わたしの頭の中に  
ぐるぐる波紋を描いて拡散<sup>くわさん</sup>してくる。小泉たちの顔<sup>おもて</sup>を覆<sup>お</sup>  
つたガーゼの純白と、床の上に落ちてしまった赤い花び  
との色の対比を思ひながら、かすかな喜びさえ感じだす  
のだった。  
なにを意味してか、ほろほろと崩<sup>くづ</sup>れ去つた三つの花び  
ら、ギンバラオンを焚<sup>た</sup>つ時は、小泉、木内、そしてわた  
しの三人であつた。うち小泉は最<sup>さい</sup>後<sup>ご</sup>に死<sup>し</sup>んだ。後に残<sup>のこ</sup>  
水たわたしたちも死ぬるかもし知<sup>し</sup>らない。自分が死ぬなん  
て一まつたく素晴<sup>すは</sup>しい事件<sup>じけん</sup>ではないか。

木内定一

瀬戸喜久生  
20.5.20 芝罘山にて左肩頭  
左上膊に連発弾を破る剣を受け  
新ノロス傷FLへ入院。顔面にも剣  
を受けあり 6.20 死去  
死亡の前日 和の詩へ来た。

(105)

土南の国の夜景は、螢の光りから始められる。この夜も  
 柳子の梢に飛び交ってはまた群がる螢たちの明滅を見凝  
 めていると、何処からか、風流な土民の奏するギターが  
 聴かれる。ラ・ラン・パルシータの哀調が乗っているよう  
 だ。と、いま傷心のわたしの胸に迫るその曲は、遠い故  
 郷の友人定むよく聞いた懐かしさを想わせた。

浜崎鎌太郎、浜崎義清たち、いまはとうしていつのか、  
 共々語りい歌い合ったものだった。彼等も言われど異郷  
 の果てに御愁を感じているかも知れない。

わたしは、衛生部員でなく、兵種の一丁士官であれば  
 ギターの感傷に胸襟を開いて陶醉することも出来るかも知  
 れない。しかし、わたしは、この日中隊の同僚と、  
 いや陛下の股肱を殺してしまつたのだ。

徳田は、運命をみればどうでもあろう。けれども、

(104)

こんな思いを連ねながら、やや上気して、わたしは窓  
 の外を眺めていた。

夕とは、ただ暗黒のピサヤ海の眺望を小、椰子舟をも  
 返しながら、夜の小風の吹き上げている。静かな夜のひ  
 とときだ。

部屋の中には、木内が点してく小た椰子油のとしし火  
 かゆらゆら揺れて、明るく螢の光りも放す輝やそ  
 いた。

六、善悪

食事は抜きにするからと、木内に断つていたので、  
 のまま、二階へ上つて窓に椅子をた。あわたたしく、喧騒  
 もきわめた昼間と比べて、何と静穏な夜のひとときであ  
 ろう。わたしは子どもころから静けさが好きであつ  
 た。

の場合、わたしの責めや負担を逃れようと出来ないので。宿命として処理をせねばならぬ残りののである。

しずろ人、小泉自身、極度に入院を希望した。事実と赤痢ではなかつた。その事は恒り軍医の診断によつて、明らかである。しかし、ギンバラオンの軍医の指示通り療養所に届けていけば、当人の死はなかつたらうし、わたしの懊惱も未然に防げたはずである。

とは云うものの、小泉本人は、入院拒否のあのような強い希いがあり、あの際、軍医に力説した通り、わたしに可能な最大の努力をしてのこの結果である。

衛生部という、いわば下積みの部署で、常に努力を惜しまず、誠意ある言動を持续して来たと考えられているこの誇りや自負は失いたくない。しかし、今、この時侯で大きな汚点になつてしまつたのである。そして……と

心中は擦点を失つた苦悩のた打っているのだつた。任氏たちの家々の灯火がすっかり消え、遠くは暗くなつて来た。

暗闇の中で、ひた押しに迫ってくる孤独につつまれ、わたしは、何だか泣きたい様な衝動にかられ、単純には片付かない狂言さであつた。しばらく、冷静な理性を以つて、心の乱れを整理してみると、今しかたまでの衝動は、或る種の恐れともなつて、なおわたし自身のとこかに纏り付いてくるのだつた。

「本内、上へ上かつてこないか。」

呼び掛けには何の反応もなかつた。云々の世界に誰もいなくて唯われ一人が置き去られているように思える。その昔、デンマークの荒涼たる沼地の枯草の影に身を伏せて、半人半鬼の怪物グレンデルを待ちかまえている

「ベニツツ」の物語りを想い起したりしてみた。

「木内、いないか。」

「もう一度呼んでみると。」

「はい。おります。」と階下から返事が上がってくる。

用心深い木内は、暗い階段を、一つ二つと数えながら上かっけてくるらしい。

暗くて、その姿は全く見ることにはできないか、やがて、

「木内参りました。」と、声かした。

「飯は食ったか。」

「はい、いまいただきました。」

「何だか無味乾燥採な言葉のやりとりである。」

「おい、木内、どうしたんだ。いやに角張るじゃないか。」

今夜に限って、彼が殊更にわたしを敬遠しようもの

なり、しはや取りつく島もないのである。

さすがに木内はそのへんを心得たらしく、

「今晚は淋しいなあ。ゆうべは、ここで安木郎を喰ったたい。」と、話題のきっかけを仕ろうとしている。

「木内も淋しいか。しかし、俺の身は淋なってる。」と

ひとまず、彼に反抗の一言を報いた。

そして、いまの今まで、考え忖えなどではいらぬな

った小泉に聞わったわたしの処置の是非論にまじり込んだ。溺れる者は藁を掴むとか。それは、まさに、わたし自

身の心理に、ひとつの安らぎを確保するための一手筋に

過かぬかっただかしれない。

「しつろ人、木内がわたしを非難し、叱責しようはずは

ない。だが、ギンバラオンへ戻れば、中隊長から喝を愛

けるのは決定的であり、覚悟はとづくにできているわ

たしである。

木内、もうおそい。休もう。あしたは土葬と火葬だ。わたくしは木内も促して、一つの寝床に入った。火葬は七、八時間かかるし、死者の腕を切断して、それを火葬に付し、体そのものは、市の郊外へ埋葬する。この方法も考えたりした。しかし、割り切れないのか、胸中を去来して、自分の体だけは横たえておいて、仲間を眠れそうに思わなかった。時々、脚を曲げたり、伸ばしたりして、何かをためらっているらしい。木内が、突然、**班長**と、**不必要に大声を上げて**、二人だけの沈黙を破った。

「わし、死なな人だは、班長のおかげでせ」と前置きした木内は、今日の出来ごとを次のように報告するのであった。

この日、昼の食事を済ませた木内は、食器を洗滌するため炊事場へ向かった。平生、軍隊の食事を喜ばないわたしは、食器具を今日とびつかり美しく磨いてやろうと炊事場へ磨き砂をもらいにいったのだ。すると奥の方に上級者がいるらしい。裸で敬礼するの事と思つて襦袢を拵けてみると、それは、彼自身のものではなく実はわたしのものであった。こいつはいけない。班長のシャツだ。早速取りかえて来なくては……と、泡あわくつてわたしの事務室の方へ駆け出したら、例のコンソーが爆走し、あとへノースアメリカがやってくる。木内は周章狼狽して、そのまま進行方向の北方へ真つすぐに遁走したところであった。

けれども、もしある場合、着ようとした襦袢が、木内自身のものであつたら、彼は水を身に付け、要領よく

上級者に敬礼し、炊事場の中には入り込み、かまどの下から、木灰を十分に掻き出し、流し場に持参し、ます班長の食器磨きに余念がないといったところに着いた。置いて、板下爆弾を至近距離内に受けて、いまごろは屍室安置されているはずだろうというのである。

人間の運命は、その一刻々々か常に幸、不幸の岐路に立っているもので、場合によっては、小泉のように、爆風によって地面に叩きつけられ即死する場合だってあるのだ。

木内の、長い命拾いの話を聞かされた。またそのことを祝福していると、たしかに、窓際付近で「ニヤーオ」と啼く猫の一声も耳にした。最初の最後、ただ一声だけであった。か、暗闇の中を、しかもこんな晩であるだけに、その声はある妻みも思っていた。

と、木内が突然、

「班長、魔除け、魔除けしとったんかいな。」と云くうである。魔除けは魔物に襲われるのを防ぐ方法で、家の門口や神棚に神符や守り札を掲げておいたり、即分の夜、柵の葉といわしの頭の焼いたのも門口に刺す風習などもあるが、木内の魔除けはより具体的である。つまり、人間の屍体へは、かならず何か鋭利な刃物を接触して添えおかねばならないという。さもなくば、万一猫

嵐、狸または狐などのたぐいの小動物が現われ、いす水かの動物が死者の膚に直接接触すると、いあゆる、魔かきすといつて、死者の靈魂にかかかって、さまざまな奇怪な現象が出来るというのだ。  
木内のいうると、瀬戸の喜戸周辺では、この心霊現象を階いで、死者の体には必ず刃物を添えて魔除け



子夜呉歌  
まほろ

長安一ヶ月

萬戸搗衣聲

秋風吹不盡

總是玉關情

何日平胡虜

良人罷遠征

を施すというのである。

いかにもプリミティブ(原始的)で、非科学的であろうとしても、いまは、鬼籍の人、小泉や徳田のふるさとで、一般的な社会通念として通用していたり、また彼等が生前、自分自身の死に際しての慶除けの方法を、何かの機会にふつと願ったことかあったとしたら、その慶除けの手段も一笑に付すことはできない。そのことは、却って二人を呪詛(じゆじゆ)することになりはしないだろうか。

出来ただけ、事は良心的に処理するに如くはない。わたしは、小刀と木内の剣身を手にして階下(かひ)に下り立った。不吉な予感か、数回(かた)俯ついたり遠去(とん)かたりした。まっ暗い階段を下りて、屍室(しかばね)に近づいて行く。あつよかつた。屍室には白布に覆われた二人二体のほかには何者も忍び込んではいなかった。柳子袖も残り

少なになつていったが、総白塗りの天井には、灯火自体の影が大きく映し出さ小ており、もう寝息の減小な、屍たちの寝室は何の不自然さもなく、静寂を保ちつづけているようである。そして彼等には、最早や何の意味もなくなった明日を待つていさのだらうか。

徳田には硬直(じようぢく)が小泉には寔解(じつかい)が来ていた。わたしは、この一夜、椰子樹の下に立つて二人のために、李白の子夜呉歌を朗吟した。

一夜が明けると、もうロツクヒードが上空に唸りを立てていた。激しい空襲下では、七八時間(しちぱちじかん)を要する火葬は出来ない。しかし日本内地の彼等家族の方には、せめて一個の骨片であろうと、正真正銘のものを届けてやりたい。そのためには死者の体の一部を切断して火葬に付すしか方法はない。

小泉と徳田の右腕を切断するためにはわたしは柳子銃を使用した。はじめこの試みであったが切断は容易であることが分った。

木内は、わたしの当番として付き添い、よく助手としてめくくする。銃で死者の腕を切断するとき、彼はその腕も押入て固定する。紋割りを滲じたが、その手元はかすかにふるえ、顔面は青白く褪せて、血の気かかった。彼にしても初めこの体験なのだし、後で考えみると、本當に気の毒をしたと思う。

二人の本體の方は徳之少尉に依頼し、土葬に付してしまつたが、その頭は、祖国日本の方面に向けてくわたとどてであらう。

一方、わたしと木内は、市内の墓地近くにガソリンを運び、その小に点火した。惹きつけられるような臭気の中

に立ちすくみながら、はろが東北の空に合掌し、二人のために敬けんな祈りを捧げた。

その日の午後、ギンバラオンへ引き揚げていった。覚悟はしていたものの、中隊長から必要以上の叱責を受けねばならなかった。彼の言葉に反論できる事項もあり、権利、義務の相関を原に於ける人間性を思い合わせて批判し合つたところで、この場合、何になるだろう。絶対的な正当性は、小泉がわたしの側に認められているのではないかと信じている自分なのだ。

服従や犠牲、このような抽象的概念によって固められ、その真相も暴露するであろうことは疑いない。衛生部員としての職に携わって来しいが、何水の場合においても、患者が完全治癒の転機もとれば当然のこことと

水、死亡の転帰もとは、その毒めは必然的に、こちらにかえつてくるのである。お前の殺したんだとばかりに、毒めも返さうべき任務であらば、診断も治療も投薬も専門外の第三者に委ねべきではない。たとえ、動機が善であり、そのプロセスが善くても、結果が悪ければ、その行為一切の内容は悪と認定されてしまうのだ。彼等の道徳的判断は常に結果論なのである。

美しい月光を求めながら、アポの高原に立っているわたしの背後に、巨大な草原を吹きつくる無情の風が冷たく鼓つてくるのであった。

七 乱れる心

二十一年一月二十六日。  
 た中隊の主力は、酷なノースアメリカの機銃掃射を逃  
 水こ、ひとまずギンバラオンまで引き返していった。こ

うかなり遅い時刻で、冷たい曇しさを放つて、上弦の月が輝やっていた。疲労困憊も限度に達しているわれわれは、ここでこの夜の宿営を結ぶのである。

分隊毎に適當な場所へ壱を求め、ひとまわ松かしかつた時がおさまると、後は元の水を打ったような静けさにかえる。

(二十一年一月二十一日)

軽度の胸膜炎の後遺症と萎縮腎の持病のある木内は、  
 智歯嚢生症に悩まされていた安井軍曹と共に、このギン  
 バラオンで、残留者として余儀なく留まっていたが、わか  
 ちあが、わたしを訪ねて来て、同宿し、世話をやいてくれる  
 ことになった。

藪かげから鼓つてくる蚊の大群のため、美しい景色に  
 に豊熟した月を蔽ふ余裕すらなく、毛布の端を内側に巻  
 き込んで、鬼の子のように丸まって眠らねばならぬか

た。  
 当番と一下士官である、本内とわたしの人間関係が、  
 こ小から先々、どこまで、どのような経過していくこと  
 だろうと憶つてみると、自然な平和を希求するわたしの  
 心は、祈りに似た願いにしなつて夢の中へ連なつてい  
 くのであった。

翌一月ニナ七日、またもアホまで進み、さらにサン、  
 ファンまで歩を伸ばした。付近の高原一帯は、いすこの  
 飛行場としかたたり、時折り通過していく艦載機のグラ  
 マンが、小さい姿をひらめかせて見える以外に、銃爆連  
 の心配はなかった。

その夜、お水お水はサンファンの療屋に一夜したが、中  
 隊としては緊急な道路偵察の任務ももっており、しばし  
 の仮眠も束の間、一夜も明けせば、また偵察の任務も

- \* Esmeralda  
    Ono.
- \* Conception.
- \* Granada  
    Hacienda.

続行しなければならなかった。

まず、\* エスメラルダ、オノを経て、\* コンセプション、  
 さらに\* グラナダ、アッセンダ付近を偵察し、バコロドへ  
 出るコースであった。しかし、このコースを遂に辿れば  
 バコロドから太郎山方面に至る日本軍の敷設路にもなる  
 のだ。しかし、現在地からエスメラルダへ出るまではサ  
 ンファンの原始林の侵入、草深い高原も踏破しなれば  
 ならないのだ。

井出伍長、藤田行雄一等兵の落伍はあったが、中隊の  
 構成員はよく苦難に耐え、夕刻に入つて、宿営予定地  
 あるグラナダの椰子林に到達した。

「この場所において宿営。」

と、命令が下達されると、まるで命のようにくたくたに  
 疲れている兵士たちが、どつと喜ばぬ歓声を上げ、互

いに慰め合うのだった。

と、突如として鏡音が一発、柳子林にこたました。か  
尖兵と谷中谷隊の周囲をくまなく探したか、ヨサツペら  
しい者も、こ小にかかわる何らの情報も得ることかひま  
なかつたのである。

めざめると、素晴らしい快晴。遠にグラナダの草原に  
さしかかった。

緑一色。その草原を渡る風が、汗ばんだ額に、全身  
にこころよかった。

二羽の燕が、よみかえる青春を謳歌してか、楽しげに  
飛び交っている。快よさそうに、お水お水の眼前を横切  
り、かなたの空中に細まつていたかと思つと、しう羽を  
翻えしてこしらに向かつてくる。同じ飛翔を幾度も繰り  
かえしているが、折り返しの、その都度、たかいた額を

見合せてはチツチツと啼く。矢のような速さで、なんの  
疲れも見せず、目覚めの官能にみちみちしているその姿。  
そして、また返しのたびに見せるかほしい胸の給紙が、ま  
るで月に照らさるノートのように角がた。

仙伝の危篤か伝えられたその夜、雨に濡れた一っ手に  
姿を写し、紅鉄漿の化粧にひまどり、そのために天帝  
より食餌を制限されたという。つまり主の臨終に間に合  
わなかつた罰なのだ。哀れもいそぐ伝説の鳥、つばくろ。

あの、うるさとの空遠く、流え流えと続く冷月の山脈  
へ、邪悪に捉われ小い歓喜の音をとどろかせていく、始  
祖鳥以来、旅した渡り鳥の一群、ふたむらの想い渡り人  
でくるのだった。

いまは遠く、幼いころの想い出そのままに、いまも癒  
は十二種の翼を拡げ、十二枚の尾羽に生命を拵しなから



今日の日も生き抜いているのだ。  
小休止のひととき。かなたを見やれば、雄大なカンラ  
オン・その脊に漂う白い雲の動き、さわやかな高原に坐  
しつつ眺めおかぬ、この一連の光景は、不可思議な自然  
の生命力に統合されて、たくましく生きよと導くやうな  
しの胸深くに迫ってくる。

雲に題す

バコロドの郊外に束こ

詩人よ。雲に詩素を感じないか。

雲は黙して動かないか

こげつくような陽光に

リサールの情熱を受け継いで

生き抜いた自然の雄大さよ

山嶽が、河が、大洋が

狂気のようにのたうちまわっている。

雲は黙して動かないか

南西方角の真ぐ近くは、バコロドの通稱セントラル  
The Bacolod Central Sugar Mlty. Co., Ltd., =  
バコロド中央製糖会社)の高い煙突が見える。

「おうい、セントラルが見えるぞ」

「おいだ、あれだ、なれと、ついでこの間まで棲み馴れ

た街、バコロドもなつかしむ兵隊たちの気持が、そのま

ま大きな声となつて表現されている。

か、やがて到着したセントラル工場脇の川岸での休息

時間には、機着を下げた艦載機グラマンが頻りにやうそ

東た、昼食準備のひととき、川原の小石を集めてかまど

を築いている誰かに、

「おい定期便だ。今日の目標はセントラルらしいぞ。用心しろよ。」と谷中伍長が叫んだのだったか、やがて、近くのあたりには小型爆弾が投下された。

無気味な炸裂の音が巨大な建造物に反響し、さらには河岸一帯を揺さぶる。そして強烈な爆風が全身におそってくる。

「眼と耳を塞げ。怒鳴る音がゆらぐ河岸一帯に響いては杜絶える。」

河の岩壁にひたたりへばりついて、機首の動きは目を瞞っている兵士は、みな申し合せてたかのように歯をくいしばっている。バリバリッと機関銃の連続発射がはじまり操縦席からの銃丸が、ビューン、ビューンと、煙りに染んだ空中を掠めるとんてくと、素早く、背を見せうつろな腹も堤防の岸の面へ押しつけるのである。背に

背骨が走り、頼みになる肩胛骨のある、こもはしつけの音いである。

一髪の危機に直面し、顔色も失って全身を硬直させるわれわれ人間の本能は、万一受傷したときに備える神の意志によつて差配されているのだ。

頭上の敵機は鋭い音波を伴い、わたしたちの足元へ無数の葉巻をたたきつける。

「不埒子、しう駄目だ」という諦め、つまり、いさぎよく我が身を死へ抛つて平然とあきらめおおせる諦念の思想は、古来東洋道徳の粹といへばきであらうか。耳目を聳く火煙と爆音、炸裂音、そして、おのれ以外の存在をなべて否定しようとする熱風、空しい青春に訣別して消えていく哀しい生命。奇蹟は願望するをによつては生まれはしない。しかし、二重否定を肯定しうる場合も

\* 湊宗玄兵長 (妻 政子) 徳島市津田町東浜1113  
東太郎山 20.5.20 頸部直撃破弾貫通破片創り戦死

\* 中島茂理衛上等兵 (妻 梅香) 徳島美馬郡一宇村古  
東太郎山 20.5.25 前頭部頭部貫通直撃破弾破片創り  
戦死

(129)

まほとどの空襲の凄惨さと、だかいの狼敗のさまを語り合  
いながらかなりの賑やかさである。いこへウキスキーの  
配給がある旨の伝達があった。各分隊から歓声の湧き起  
こる。

指揮班では中隊長も中バ一献<sup>いん</sup>も傾け合った。もちろん  
偵察完了の福であるが、一般班では強行軍の疲労感と  
いうことであろう。

生酔<sup>なまよ</sup>、気嫌<sup>がけん</sup>で、ふらふらとあやう、ちら回っていくと  
どの分隊も盛大なにかわいである。けれども谷中分隊で  
は、なんの気焰<sup>きえん</sup>も上からばこ、静かに一つの陥没地帯  
を成しているではないか。

谷中隊長はいないし、甘蔓<sup>あまむす</sup>の後、中島が黙然と坐っ  
ているだけである。

「また何かやらせたな。」

(128)

少くないのだ。この日、わたしたちの仲間にもこのよう  
な事例があった。

敵機の去ったのを、被害調査の結果の伝えられた。工  
場の設備、器械、備品等の損害は甚大であった。しかし  
人的損傷は軽微であったようだ。海軍関係の下士官一、  
兵二の犠牲が出たのは悔まれる。

幸いにして、島本隊の傷者は唯一人しかなかった。あ  
のすさまじい爆撃、銃撃の後には珍らしいことだった。  
誰しとも思いは同じだった。平穩をとりしめた河の瀬  
で、さきほど味わったあの憎悪<sup>おん</sup>の思いを、きらいさっぱ  
り流し流したいと、誰かの発言があった。谷中伍長、  
田中萬治、三好貞一の三人とわたしは、軽く水浴をして  
さわやかさも挽回したのだった。

夕方、投宿するバコロドの仮兵舎では、どの班も、さ

香川 進 上等兵

香川 龍喜寺町出身

大和次橋成安邸で阿波踊りを披露した。  
戦死に今はその姿を思ふよしもない。

(130)

気狂いじみた各分隊のざわめきをよそに、感情のため  
かちかちに凍りつき、冷徹で厳しい軍紀のみに頼む紋び  
つきかいかい崩れやすいかも是せる惨状である。中隊長  
も小隊長もこの状況にはまだ気がついていないようだ。  
まず中隊長に一言話してやろうと考え、探しまわった。  
か、その腹中、遂に彼に会うことは不可能であった。  
第一小隊では、各分隊毎に気楽な車坐を作り、さかんに  
に唄を回している。

誰かか右翼分隊長富田伍長の人徳を稱賛している。その  
背後も通り抜けようとする。そのあたりを掴えて、

「班長、どこへ行く？」という声。

やや叱り風の声の主は香川上等兵である。立上った  
か丸くたくましい団体を千鳥足で支えるのに精一杯の様  
子である。

(131)

※ 坂本太郎  
20.6.22 天神山にて死す 脚氣病 栄養失調

「班長、逃げろか。」

逃げはしない。えらい強気だな。香川と笑いかける  
と、「ほいたら来いや」と土佐弁でくる。例の長ったる  
なでなから、もう全身でいやっている。

招き入らされた。この会場で、わたしはすつかり逃げ  
てしまった。

そのころ、瘦身の坂本太郎が安末節を踊りはじめた。  
すると、香川が、向う鉢巻をよじつて坐の中に乗り出  
て来る。赤いしかめつ面の香川と、まじめくさった坂本  
の白い顔が実に対照的でおもしろい図であった。

二人の踊り手は、互いに相手のしぐさを見まは合わせ

、踊っては、また相手も覗きこんで、結構とみ入った。誰

い芸も見せるのである。雪軽と芝、そのもののうまさか  
混然一体 周囲の和に解け合って、ますます場の空

団気を作り上げ、全体の興奮を高からせていくのだった。やがて、一人か「踊る阿呆に見る阿呆、同じ阿呆なら踊らにや損損」と難したたのでたまらない。たまらず、満場、唄と踊り、そして歓声の坩堝と化してくるのである。

続く一月三十日は休養日、全員に外出の許可があった。浜兵長に令いにゆくと、予想に反し、彼は寝転んでいた。曲げた脚へ、更に片脚を掛けて、何かの雑誌を読み耽つていとるところであった。このホリスは、彼がよくする姿態であった。

「崇やん、外出しようか。」

「さうさ、さうさほどの期待もしたず、軽妙な一種のいやからせのつもりである。」

「暑いからいや、ほとんどの外出させず、いつも休養日

パーセントの最古参兵長と、船大工の崇やん、浜兵長の応答はいつもこうである。

「何か買つて来ようか。」

「うん、生子の酥漬けか食いたいわ。」

「グロテスクな、あんなのそんなに食いたいのか。」

「あれも三倍酢でやっこん。奥歯のあざうでギリギリかつてよ。軟いとし硬いとしせいと酥漬けとし……ああ、あの味、よう忘水へんわ。」

「またはいまった。此御共和団に七千余の島をあげ、生子の酥漬け売却しているは、いまだ是聞せずだつていから致しかたなしだ。おつきの好物シューマイで我慢しろよ。」

わたしは彼の好物をよく知っている。わたしは、彼のシューマイに泣き、彼のシューマイに喜びを共にし

たある時機を乗り切つて来ているからである。

相も衰えず、キラキラ輝やく、そして澄け<sup>くら</sup>うなアスファルトも踏んで、わたしはバコロドの中心街に出た。まず、羨のためのシューマイを注文し、ロサリオ街を右に曲かったところで偶然にも連隊本部の高級軍医に出会った。

「どうだ状況は？」

「ええ、いまのところすまじなっています。」

清潔、そうな長髪<sup>ながかみ</sup>を貯え、一旦小柄<sup>せうせう</sup>そうに見える高田軍医との出会いがこれである。

軍医殿、入りましたようか。遊ぶのはセブかいいですか、

バコロドだつて二、三、いゝところがありますよ。ご案内しましょう。

わたしの案内で、二人は<sup>クラ</sup>バコロドに入った。このバー

には、時折り日本軍の将校や、気の利いた下士官が出入りするというので、現地人の知人、マラタ氏に連れ込まれたことが最初だった。

閑静さと、家庭的な雰囲気<sup>きんじやう</sup>がマッチして、好感の湧く場所なのだ。四十に足りなすの、富のいい世帯福な体肥のマダムが近よつて来た。メニューで風を伝わりながらウイスキーと生菓子を注文すると、それをカウンターへ通し、新米の客、高田軍医に目礼し、そして彼をわたしに紹介させるのだった。

「此処へは類<sup>な</sup>類<sup>じ</sup>馴染みかね。」

煙草ライターの火を点けながら、軍医はわたしの類を見る。

「ええ、四五回も来たでしょうか。わたしの名を知っているのは、あそこの大食堂の、変にませたマリコって

小娘かい人ですか、その小が教えた人でしょうか。時々、市内へ衛生巡察に来たり、原住民たちにもたまに授業をしますので横の名も少しは知ら小ていますよ。」

「ほほう、そんなものかな。」

「いいえ、白石や中西経長なんかは、ハマモトタイドクトル、シミズタイドクトルなんですか。」

「いまの女性は、ここのマダムかね。」

「そうです、とてもエネルギーでアクティブな人で」

「僕がマダム、バタフライなんだからうんですか。」

「も、十六才で結婚し、三年後に夫は死なれ、この方二十数年を独りで通していらっしゃるのです。いつか僕が言うべき

「りましたよ。人間の細胞は七年で全部チェンジするから」

「マダムは完全にバタフライで、今後はミス、バタフライって呼ばうかになってね。そしてたら彼女、笑いましたね」

「え。その小からアダルトになつていらっしゃる娘か一人あるんですよ。矢張りスペイン系ですから、それにハイブランドでもあるので美しいです。」

「そうだ、理知的な感じだね。」

「ええ、案外雄弁家です。」

「君、スペイン語はやるかね。」

「いいえ全然です。この前は英語で人間精神論を交えたのですか、何かディスカスしてみますか。」

「いやいや駄目だ、医者仲間には語学は弱いんです。」

「そのとき、マダムが理おれた。軽快な服装だ。垢抜けした全身の線がすっきりしている。」

「シツダウン、レットトーカー、アウトサミング、Sit Down, Let's talk about something」とわたしがお話しかけて、わたしは一つテーブルを囲んで雑談に入

った。軍医の英会話も流暢だった。昨夜某将校の下

士官把打事件が發展して、わたしたちのおしやべりは、愛情論に移行してしまつた。

この席での人生の絶対価値は、誠のこころであり、愛情であつた。

わたしは、愛情ってのは少しスケールが狭いと思つた。ね、日本の軍隊だつて本質的に要請するべきものは、やはり誠心誠意の問題なんですよ。上級者は部下を愛し育てはぐくむ責任はもつていますよ。あなたが昨夜路上で見ただと、この誠の愛情の発露なんですよ。こゝに愛情ですって、どうなんですよ、単なる愛情でなく、いわば骨肉的至情と申しましよう。こゝれを誤つて小乘的、婦女子的感情の中に弱れて、あぶついている愛情とは分離して考えたといふ誤なんですよ。結論としては、あなたのおしやべりの愛情と、死生かたじけなく俗行の軍隊社会に行わねる愛情

つまり、わたしの言う誠心とは若手の開きがあるといふことなんですよ。おわかりになりましたか。

高田軍医の存在も意識してこのわたしの主張は、これで終つた。

「オウ、ワンダフル」とウイスキーを盛るマダム。その手元をながめながら、幾度も頭を上下にゆすつて微笑む軍医。

減多ひんたに顔も合あわせることのない二人が、楽しい雰囲気です。し得た午後のひとときであつた。軍医は、

「キヤンラブ、イノチアセイル、ライクリレイティブと言つたかね」と、わたしに訊ねる。

「ええ、アメリカ訛りで言つたんですが We can love each other like relative if there is love between us」と、いつたんですよ。わたしは、どうも入らな

ら、幾本目の煙草に火をつけた。  
 アメリカのスラング（訛り）が強いし、やはり、相手もい  
 くらか知ってないと、合話は進みませんです。続けて  
 わたしはそう言ったが、軍医は今日はえし振りに英合話  
 を聞かせてもらうて大きい勉強になったと言ひ、懐中  
 時計のねじを捻りながら、壁面の大時計をかえりみて、  
 「もう三時だ。そろそろ退散しようか」と言った。

またの命令を約し、そのまでの五日の無事を祈り  
 合いなから、敬礼を交換し、彼は北へ、わたしは南に、  
 その水の小の方角へ一歩も切った。

手頃な土産にと生菓子も求め、憲兵分隊の前を抜け  
 て、右に折小、マラタ家の前に立った。

わたしは、このマラタ氏宅へ出入りしはじめたのは去  
 る年の七月下旬あたりからであつたと思う。バコロドの



南端、Bacolod High School を上校してゐた當時、

山口部隊兵舎の東隣に医務室を開設してゐたわたしは

最上にてござつた患者に後兵長がいた。原因不明の熱病

で、わたしや他部隊の軍医達も困惑させた後は、四十度

以上の高熱が数週間も持続する状態であつた。

病床に呻吟する彼は、薬物投与の甲斐もなく、食思不  
 振で体力は次第に失なわれ、いくばかりであつた。

病名の決定は誰にも出来ず、便宜上、わたしは此病室

リング熱と記録し、報告もこの小で通してゐた。回復の目

度もたらず、誰の目からも、死の転帰をとるであらうと

考えら小てゐた。すべての関係者から見放さ小てゐる後

を救つてみようという念願が日毎に強まってくる自分に

氣付いたが、この小、高田軍医と一緒に入つたバーで話  
 つた「愛」に小とつく小のかし知小ない。

明けても暮れても後は快方に向かあなかつた。だが、人間の肉体に抜け目なく神経を配った神は、また人間の心にも抜け目なく愛する者のために捧げる神経も配っているかも知れない。

ステンドグラスを直赤に染めた夕陽が西に没し吐息する大地に、ヒサヤ海を渡って忍びよる涼風が、なんのためらいもなく接吻する。そして、晴れた大空には、その女の鮮やかな暈(あざ)がまたたき、それは美しい南の国の夕(やまひ)の郷愁せつなるひととき。ガマンチエ(夜の乙女)は妙な香を放つのである。

乙那半度当時の想い出でも、まどろんでいたかと思えない。突如として後にはね起きた。真紅の樓閣に坐っているはずの戦友は、そこにはいらず、湯気を立てていた香り高い肉饅頭(こしあん)は、恰も蝗(いなご)の大群の後の緑葉(きよば)の

のいづくに消え失せている。

彼は、意識と無意識の境界線上で、

「ああ、あの焼売(しやうまい)を喰ってみたんだ」と、もう一度、あの乙那半度の肉饅頭(こしあん)も大臍(おへそ)皮(かわ)に描き、言葉となつて信じたのである。後の寝言は本内によつて盗聴された彼の願望が伝達されたこの事例は本内とわたし以外に誰も知らない。

その夜、後の介抱(かいぼう)にあたりつた本内は、わたしの指示によつて、乙那料理屋の食堂を覗きまわつたのである。世智に丈(たか)せた本内は試食を行ない、風味ある品として決定したのか、市場前(いちばまへ)にあるマラタ氏の経営する店の焼売(しやうまい)だったのである。

その翌日から焼売(しやうまい)を買おうわたしも本内の顔は、見られぬことになつた。美しい女主人と馴染み、夫の

マラタ氏と言葉をかちして遂には深い親交の人となつて如何の不思議はないのだ。

マラタ氏はマニラのフィリッピン大学の出身で経済学を修めたとかであったが、彼の此のインテリさと飾らない落つきと物柔らかなさが好きであった。

占領政策による軍人と住民との感傷や気がねは、わたしたちの間にはなく、最初は、英語会話の練習のたぐい台にひしなればと考えていたが、いつのまにか打すくつろげる、いわゆるアットホームな人間関係になつてしまった。

こうした日々の経過の中で、後の食欲は旺盛に焼売一つにしほら小であった。ハ総その他、支給を受ける官給品等も民間で売却し、金に代える方法も考へてみた。しかし、陸軍の軍人に対する給料は少額である。当時

伍長の月俸は四十七円だったと思う。一日三十円也の焼売のまかないが、そう簡単につこう筈はないのだ。官給品の煙草もそんなに度々支給されるわけはない。資金カンプも遂に底をつくことになつてしまった。

故郷高知の朝倉駅で、わたしの武運を祈りながら、見送りのプラットフォームに立ちつくしていた母。いまわたしの腕に、あの別小の際に買入らした時計が、カチカチとリズムカルに時を刻んでいるのだった。戦場に臨むわたしの形見となるか、千載一遇の機を得て、もしわたし自身が故郷に帰ることか出来たとして、もしまた母の形見として、さう深く記念し、保存しなければならぬ貴重な時計である。いそれその時計は、戦野の風雨にさらされ精巧度も欠き、時計としての機能も失つたとしても、母、子、いす小の形見の心としての意味と



価値を失うものであろうはずはないのだ。

けれど、わたしは決意した。眉間みげんに一つのひらめきも寄せて、マルケット通りの時計商「ジュエルス」へ入ったのは、その翌日であった。予想以上の金額を受け、歩く舗道は随分の日照りではあったが、さすがに気分は明るく、頭も爽快であった。表向きは借金をしなくては行かず、後には、はつきり知らせてはいたが、本内は時計の表却をそれとはなしに感付いているようだった。

数日後、例によってマラタ氏の店を訪れると、マラタ氏が片目を使つて挨拶した。わたしは彼にウイニングをしてきた。二人の間には何の作為さくごも虚構も必要はないのだ。台の上に英字の新聞が載つていた。

新聞へ眼を通して、いるわたしは、  
「ナノ、オーラス」と聞いかけてくるマダムの声かした。

店内の壁時計は動いている。しかし、習慣は恐ろしい。左腕を曲げて突碇とつたに時計を見ようとすると、これこそ時計は、通り一つ距てた時計商の棚の上にあるはずなのだ。かなりの漁杖あきざも見せて、時計は診断室へ急水たとこれ言おうと思ひ付いたが、その作為は本人の効果も奏しなかつた。

マラタ氏は私をカウンターの近くに招き、手品が何かを演ずるような表情と動体で一つの時計を手はぶらさげて、わたしに足せるのだった。まさしく、それは、わたしの時計であった。筋向うの時計店「ジュエルズの親爺おやじに借入かかしたものを擬まかしなく同一の代物だった。

わたしは驚き、眼も瞠まはつたが、その謎は必かなずかて解けた。マダムの説明によつて一切の了解が出来たのだ。この人たちは、異邦人のわたしに興味を持っており

\* Chao mai.

(148)

夕方、店もたたんで、家庭に引き揚げたのすに、わたしの噂もよくしている程なのである。毎日店を訪ねて、焼夷も持ち帰るわたしの様子に、いれもなく興味を引かされたようだった。その真相を探ろうとして彼等一族は暗躍し、日ならずして、患者後に捧げるわたしの心を感知したわけである。

ドクトルが時計を持っていった。ジュエルの主人は、わたくしの主人の友人の一人なんですよ。あなたかこゝで注射をしていたとき、夫をカルタをしていた人、それがジュエルの主ペンコットでしたし、いつか脚本の装着をしていらつた老人は彼の母親だったのです。お母さん、このごろすっかり全快したといつてペンコットは喜んでいました。シユーマイ（チャオマイ）のことや、時計のことで、何があなたの周辺で起こった

(149)

のではないかと心配して、前週の金曜日の夜以来、情報集めの行動をとつたという訳です。昨日エアポートで砂糖をいらつたお礼にといつて、あなたに甘いウイスキーを持っていった爺さんかいたでしょう。あの爺さんは我弟のペトロニオのすぐ向う隣に住んでいます。たしか去年の九月だったか、最初の空襲のとき、破産で創業を受けていたとき、ドクトルに手当てをしていらつたとかで大そう喜んでいましたよ。日本の軍人の中はいい人はいるんだよといつて我弟にまで説得してましたよ。あのウイスキーはペトロニオの物ねえでやっている自家製なんですよ。

「いやーまいった。そうでしたか。驚きました。社会は複雑なものだと思つてたのに、案外シンプルですねえ。思ひもよらず、こんなことになつてしまった。」

結核・時計は手元はしとり、チヤオ・マイは後患者  
 の治癒の日まで無償で提供するということになった。  
 まことい申し訳ないが、いままで、わたしの平素を  
 受けた人たちの、その礼として、いま私の面している  
 危念を救ってくださるということになるのだろう。

十九年十一月一日、この日はマラ多家の弟ペトロニオ  
 氏の三十四回目の誕生日である。すでに招待状を受け  
 ていたわたしは、徳久少尉の了解を得て、軍服姿のま  
 ま、マラ多家を訪ねていった。

マミラの大学で経済学を専攻し、首席で卒業したとい  
 う秀才のペトロニオ氏はシナイホールに勤務しているとい  
 うことである。彼はわたしも人並みにドクトルとは  
 呼ばないでブラザー（兄弟）と呼んでくださるのだった。  
 時々訪ねていくわたしはウイスキーなど調合して飲ま

せては喜んでくれる彼であった。この夜も、水が本堂  
 のブラザーであつたらう人なほ嬉しいだろう。と  
 わたしの背中を感度したたいてくれるのだった。

椅子に案内されて、大方の客の出揃うまで、ティンプル  
 を狭んで談合したが、人生観はむしろ人、東洋民族の  
 団結とか発展の行方等々話しは尽きなかった。

しかし、客人が出揃い、顔見知りであったホットン氏  
 の祝辞をのべ、そのあと三十四回目の誕生日を迎えた当  
 人のペトロニオ氏が立ち、私はすでに人生の半ばをすぎ  
 ているけれど、若さの確証である情熱は失わなかつたり  
 だ。とたくましい信念を披歴して大喝采を博した。

賑やかな宴のあとしばらく長い間おしやべりをし  
 た。アメリカなまりの英語もよく理解出来るようになっ  
 た。時折、椰子葉をかすめて、あか友軍機が飛び立



つていった。  
 「いんない、あは特別攻撃機の編隊です。彼等は  
 雨が決して帰って来ないです。翼の下の、その五  
 百磅の爆弾をいただき、美しい日の丸のついた愛機しう  
 とし敵艦船のまった中へ突入していくのです。わたし  
 はこうして皆さんとお目にかかれる日はなくなると思  
 います。いつまでも御愛ください。軍人は上部の命令  
 によって動きます。命令の如何では、挨拶に出る時  
 間のない場合もあります。おたかいに生きていけば  
 命令は出来ましようが、数日後、数十日後、あたしから  
 なるのインフォメーション(情報)もなければ、ドクトル  
 トウマツもパライ(死)になったと人に伝えられた  
 い。」  
 わたしはお別れ近くにたつて、このような英語やがら

も語って居合わせた人々に文道を感謝した。

くさあらに雨の降るように蟬がすたいていたか、柳  
 子の葉末にのえる月光は美しかった。南国の夜風がわた  
 しの胸の中も、柳子の葉先にもなからす乱れているだ  
 った。

八 戦友たち

明けて一月三十一日、報告書類を完了したわたしはミラ  
 イの連隊本部へ向かった。しかし十三粒も腸うたごらい  
 への連絡車は是当たらないうちのい空襲下のこととて、夜  
 間以外の国道を車輛で通ることは危険極まる景争なのだ。  
 この日、早朝から始まったノースアメリカの超低空で飛  
 行による銃撃は止まず、わたしは結構一日も棒に振  
 っこしまった。  
 バコロド飛行場は数回、銃爆撃にみまわれ、あの橋梁

が破壊され、川岸に撃たれていった水牛の射殺された  
という情報も伝えられた。 要請により十八時半か

ら中隊主力は、破られた橋梁現場に赴き、その修理に  
あたったが、内外情勢が最近落ち着きも失っている中  
隊長に対立したらしい谷中伍長はじめ数人の下士官が抱  
えられたのもこのときであった。

明少やらぬ二月一日、二時、中隊は車輛を連ねて、コ  
ンセプシオン地区へ進展した。

二本椰子、太郎山陣地に通じる道路の補修拡張が、この  
中隊の任務であった。

隊員は、分隊単位で、付近の民家に兵を定め、指揮班  
は椰子の葉かけのニツパーハウスに位置した。しかし  
これは仮りの住居で、道路補修の進むにつれて行く先  
先で營営することもあった。

この作業は丸四日間も続けられ、次の作業地、エスマ  
ラルダ、オノへ移って行った。

兵舎の新設にあたっては、植に激化の一番を逃<sup>たか</sup>つてい  
る空襲に備えて、偽装に注意を払い、巨大なマンゴ樹を  
利用したりし、その下に幾つかの草葺きのバライを作る  
のであった。

近くの住民たちは、ほとんども使役<sup>しええ</sup>に狩り出され、実に  
騒然たる光景が展開されたわけである。

宮本軍曹とわたしは、イウロギオ、クバンエラオとい  
う現地人の集団に指図し、青竹を伐り倒しては、その水を  
割らせたりした。彼は随分みだらな話を平気でして、わ  
たしたすも笑あせたが、その割合に能率は上がった。そ  
れにも増して、竹割り作業は多<sup>た</sup>うって、文字通り破竹の  
勢いで仕事を片付け、皆の驚愕の対象となるのだった。

(156)

彼が「Eulogio Salanguero」とすべし  
達等が署名したのにも感心させられた。そして、宮本軍  
曹が命名した「奴助兵衛」の汚名は極度撤回取り消し  
となった。

一週間ばかりの作業の結果、粗末ながらも各分隊の小  
屋が仕上がった。本格的に、ここのバライに移り棲むこ  
とになるのだ。

ここの作業は、かつて砂糖きびの輸送に使用してい  
た軌条の取り外しと、インバン河への架橋である。太郎  
山にはほど近いこの高原地からは、バコロド、タリサイ、  
ニライの海岸が美しく見おろされ、特に朝夕の眺望は  
格別であった。

ひと頃の名残りを止めて、高原の一角に砂糖きびの植  
えられしている地域があった。常夏はげしい太陽の恵み

を受けながら繁茂していくその葉摺れの下で、たくましく  
く節くれたった茎がいくいくと伸び、その中を走る甘い  
液体は、しだいに濃縮され、基部に集結しくゆく。そこ  
には高い糖度が黒ずんでいるのだ。

この地ネグロスには殆んど四季の別がなく、兵隊や下士  
官たちは、連日の炎暑を耐えるのに苦労が多かった。か  
作業は着々と進行していった。山口兵長の腸捻転のほ  
かは、内科・外科いずれも患者が出ず、わたしにとつて  
何よりいいことであった。

けれども全般的に日本軍の戦況は振るわず、すでにバ  
ラワン島の玉砕がどこからともなく伝えられていた。上  
空には美しく友軍機の影すら見え、なにか物足りない  
無気力な日々が近づいていくのであった。  
敵機には、いつか受け身も敗北で、山口部隊からの情

(157)

- \* 徳久(土居)勇 南園市十市167. 08886-5-1473.
- \* 井上久男 高知市五台山 0888-83-1006.
- \* 生田 巨 20.7.6 桜盆地(Bandanaway)にて死去
- \* 富田 正道 20.4.27 名寄台にて左頸部盲腸銃創心  
初級島FLに入院 20.5.18 死去
- \* 谷中 繁富 行方不明
- \* 浜口 勝俊 戦死 留守宅 宿毛市小浜紫 浜口が以(市)

\* hacienda  
Spanish. 牧場, 農園の意

(159)

夕焼けに染まるカンラオンヤシライ山の連帯は雄大で、  
ほんに小さい存在であるわたしの心を魅く壯麗さを秘め  
ている。刻々と変化していく雲の色合いに車の動揺さえ  
感じないほどだ。実に十五日振りのバコロド入りだった。  
残留していた徳久少尉、井上久男兵長、生田上等兵、  
土砂の回収に來ていた谷中や富田伍長たちと、いろいろ  
情報も交換し合っては、海軍の無力を嘆いたのしこの夜  
のことだった。(二〇二一五)

翌日は水野隊軍医を訪い、薬物に關する指導を受ける  
ことが多く、そして旅団本部付井上曹長と薬品や診察に  
關する項目で交渉もした。午後コライへ赴く途中で銃  
爆弾の洗礼を受け、かろうじて町へ入ったが、すでに日  
はピサヤ海に没する頃であった。  
その夜は三三九自動車隊の衛生下士、浜口伍長に一夜

(158)

報も耳にはさ人では、切齒振腕して、日々に敗戦の憂  
き目を意識し続けねばならなかった。  
二月十一日の記念節を機にして、日本空軍は一大攻勢  
に出るぞと噂されてきた。しかし二月の中旬に入ったか  
な人の変化も見られなかった。軍の意図部はどうしてい  
まんだろう。敵機は日に日に数を増し、日に日に攻車  
の回数も増えてくるのだった。中隊長は友軍の状況につ  
いては何も語らず、中隊の兵士に対しての所信の披歴も  
ない。中隊の士気も次第に失せていくように思われるの  
だった。  
三月十五日、ホサリオ・アッセニダを疾駆する車上の人  
となる。連絡の任務を帯びて、バコロドとシライ方面へ  
の出張である。車上二時間も、ほとんども移りゆく風景に  
捉われる自分であった。

20.6.20 高知 赤崎  
 愛媛 周桑郡 壬生川町 20.6.20  
 19.12.9 右大腿骨折 バコト 空港



(160)

を乞い、たかいに思いを交換した。激しかった初年兵士  
 時の訓練、制裁の厳しかった高知陸軍病院の内務班。時  
 病患者の出た高知城への担架演習、等を語り合っている  
 うちに、今は離れ離れになっっている同年兵へのなつかし  
 さが連なっていた。田井秀美との千松公園での想い出  
 にもなつかしい。田中稲城は何かいっているだろう。横山、山  
 本朗、横山正美、浜田、橋田、等々次々に想い浮かんで  
 くる顔・顔・顔。か胸の中に去来するのだった。  
 さわやかな朝を迎えると、もう、恐らく再会出来な  
 いであろう二人は、互いの無事・武運長きを祈り合いな  
 ら、丁寧に別れの敬礼をした。その時、軍靴の踵がカ  
 チツと同時に合わさ水たのが印象的であった。  
 このあと、連隊本部の恒川軍医と打ち合わせをし、  
 つきはシライの療養所分室へ足を運んだ。

(161)

ミミには、去年十二月六日、バコト空港で作業中、  
 爆弾破片によって大腿部に受創していた青野一等兵と、  
 その付き添いの森松一等兵がいた。煙草に不自由してい  
 るという聞き込みをしていたので、百本入りのシライ煙  
 草を一箱、菓子一袋を求めたが、これはわたしに出来る  
 彼等二人への精一杯の気持ずの表現であった。  
 青野は、かなり元気さもとに戻っており、紅潮した頬  
 に喜びを浮かべてわたしを迎え入れてくれたが、右大腿  
 の骨折がうまくつなかっていなかった。変形したまま固  
 くなっている脚が不憐に思えてならなかった。ほかに用  
 件もないまま、中隊内部の出来事などを話しているうち  
 近所の教会の鐘が乱打された。  
 「班長殿、空襲です。」と言った森松の舌が乾ぬうちに  
 ロックヒードが三機、編隊を組んだまま通過していった。

すぐ後で機銃掃射の音だけが耳に入ってきた。目標はど  
うやら空港らしかった。

病院を出て舗道を踏むと、最近滅多に雨がなかった。爆  
音の耳に入って来た。足を止めて上空を仰ぐと友軍機だ  
った。翼の目の丸が眼に映るように赫く、くつきりと見  
えられた。柳子の葉末にその司令機は消えていったが、無  
事に帰還してくればいいかと思いのかかる細い姿だっ  
た。

小型車に乗って、悪化の一途をたどる比律空軍の司令部  
や日本近海の状況に思いをめぐらせているうち、車は  
バコロドに到着した。

次の日は、めずらしく連隊本部から、恒例軍医と堀内  
伍長の訪ねてきてくれた。セツかく二人が持参してくれ  
た薬物、消耗品を見て、わたしは量が少ないといって不

平たうたらうだった。しかし、それは一歩の足せかけで、  
内心は、こゝろでしばらく助かるといふ安堵の方が大きい  
ウエイトをよめているのだった。

間もなく指示通りやってきた車に乗る。車上の人とな  
ったか明るいバコロドに比べ、殺風景で狭苦しいエスマ  
ラルダでの生活が苦になつて仕方なかった。

ギンバラオニに、ついこの間まで、患者だけかたまつ  
て残留していた安井軍曹以下七名の兵士が、数日前  
にコンセプロミン地区に移っているはずだったので、  
そこに途中下車してみる気になった。

コンセプロミンの椰子林をくぐる時、その当時、連絡  
車勤務にあたり上野分隊のいた仮小屋に、彼等の  
つどいがあった。

安井軍曹は難症していた齒槽膿漏が全治したため

秋山富久  
倉橋吉孝

一息台にて20.4.14 右取部陰衰  
一息台にて20.6.5 銀台に侵入  
F.L.入院中 20.6.5 死去

木下義孝 吾の檀紙村

(164)

エスメラルダの本隊を追及したというところで、倉橋、  
木内、小原をして秋山たちだけが残されていった。

適当な寝薬はないまじし、さしあたり予後の心配のな  
いように彼等に投薬をしたあと、その夜は、この場所  
に一泊することにした。

この日の宿営は、ごく少数グルツへの集ったただ  
けに打ちとけく楽しかった。

翌朝、時半ごろからエスメラルダへ帰っていったわた  
しは、三本衛生兵と共に書類の整理にかかったが連日の  
勤務の疲れによるものが、気分が優れず、途中で止めて  
しまった。

巡視かてらにたすねこった夫々の分隊では、最近  
噂に上っている連合軍上陸の可能性についての議論で  
湧っていた。やがては奥まった山間の湿地帯で、

(165)

わたしたちは、お互いの肘の底を探り合いながら玉砕の  
決意をする方向に追いつまされてゆくが、これ知れない。

敵機からの銃撃の少ないある日、何気なく現地民のバ  
ライに立ち寄りみると、

「トクトル カムイン フリーズ」と、抱き入る声。  
いささか狼狽したか、聞いたことのある声である。誰か

と、推定できぬまま、竹の組み合おの梯子を上って中  
の部屋をのぞいて見ると、例の愛嬌よしのダバンクエラ

才が坐っているではないか。彼はこのファミリア(家族)  
らしい。妻と、三人の子と、しをかかえ、毎日の生活に慣

れているとのことだった。  
なんのきわ立た願望もなく、ただ日々を無事に生

き延びることだけに目度をおいている彼も、哀れといえ  
ば哀れである。いろいろ話し合ったが、そのとき、一人

の老爺が上つて来た。客人のわたしの存在に気付いた爺さんは部屋に入るのをためらっている様子だった。

「カム、イン、プリーズ」

客人の声に、わら編みの帽子を手いして頭を下げた。彼は、やはり、ダバンクエラオ氏のお父さんだった。ヒリッピンでは、人生六十年が通談になつてゐるらしいが、日本では「人生五十年」が通り相場だよ」と言う  
と、客人が、

「それは、ドクトルが五十才になつたらフィリピンへ来なさい。少なくとも十年は長生きできますから」と、あっさり割り切つたので、一座はどつと笑ひ崩れた。その笑ひ声は魂消たのか、壁に響いてゐるニッパ椰子の葉をかき分け、その間から顔のぞかせたので、また一同が笑つた。そして、その時、

「テレ」 と呼び、ダバンクエラオがその子どしを抱え上げた。子どしの右腕を握りしめていたダバンクエラオが「見てください」

と、いいながら見せる。その子の指は六本もあるのだ。

七才になると、その子の掌から小指の外側へ、さらさら小指の形も整えた。しかも爪まで具えた小さな指が生え出しているのだ。

「切りましようか。簡単に。」 と、わたしが言い、少少の父の親をのぞくと、炊事をしていたらしい母親らしい人が出て来て、

「ノー、ノー、パタイ。」  
と云うのだ。死ぬので嫌だと考えてゐるらしいが、考へてみれば、低い衛生環境の中で育つてゐる原住民にしてみれば無理からぬ一大幸であろう。

「機会があれば、また来ましよう。」  
と言つて、その家を出た。しかし、なんとか切除してや  
りたいたいという思いは強かつた。

屯所に帰つていくと、トツテンカン トツテンカンと  
すくぶる景氣のいい樵の音が聞えてくる。中島茂理衛  
上等兵、後兵長たちの勤務する鍛工場から響いてく  
る樵の音である。

鍛工勤務者たちの粗末な小屋の二則を通り過ちて  
わずかな傾斜を下ると、そこが鍛工場である。

突如として現れたわたしを見つけて、後兵長が、  
「よう、班長、芋喰わんか。」  
と典型的な徳島弁である。例によつて例の通りで  
ある。

「何だ、芋か、さつま芋なら一つ、カモチカホイな  
ら二本しらおうか。」と、わたしは笑つた。すると、向

"very good"

うに本しらおうか。と、わたしは笑つた。すると、向  
う鉢巻の格好よろしく、鍛冶本職の中島茂理衛上等兵が  
「兵舎の一番奥の右側にある。ベリゴール（上等の味）  
やせ。」と羨に給杖する。

羨は、甘芋饅頭を櫃張りながら、  
「うん、うまい、うまいわあい」と奇声を上げて誇張す  
るのであった。

「カモチは二つに頼みが一つ。」 植音に合わせ、わたし  
しか口を切ると、

「ようかす、何もし云つてみない」と羨がおどけて、二則  
鉢巻をもう一度、きりりと締め上げて、催促してくる。

「尖刃刀という奴だ。小さい手術だ。腕見せな。ええだ  
その腕見せてくれ。」

植音に合わせ、さう言ひ、さらに紙切小に図を書いて



「おうだ、切水るか。」  
 「細工は降々し、切水ないものは、」あなたとわたしの縁だけよ。」

おもしろおかしく、平生、兵隊たちから人気を聚めて  
 いるこの二人の駄じや小に、ときおり、わたしと相の手  
 を入水ては、後の手元を見ているか、流石は船大工の業  
 ぐんの腕の流えである。

いよいよは上ったようだ。蝦蟇の油売りの前口上よろ  
 しく後の切水味を試すと、一葉の白紙がさらさらと数を  
 増し、あたりに乱水散るのだった。

「やっぱりうまいしんだ。思ひまゐるぞ。」

その水を受けとつて、ほくそ笑みながら、指揮班へ引ま  
 かえそうとすると、その夜中へ、後の音が、

「班長、今晚、馳走するぜえ」と言つた。その水に添えて、

「なにの、馳走だ」と聞き返す声にこたえて、こんはは  
 「豚と寿司」と中島が舌を引いて言う。

「よく酔があつたなあ。」

「なに、トバの腐ったやつよ。こんな会話のやりとりだ、  
 トバとは椰子酒の夕ガロク語なのだ。」

「とにかく招は小に行くよ。わたしは歩き出すと、また  
 後の音が足を止める。」

「あのなあ……儂がチヨチヨンと手を打つたら来いや、  
 よし、よしよし。」

この頃になつて土佐の方言に馴水た後の名調子か、こ水  
 である。

わがわが指揮班まで呼びに来ると、か水等が口頭散還  
 している下士官たちに見つかると心配があるかも知れない、  
 ひとまず、指揮班にとつて返し、あらかじめ準備して

おいた医療<sup>イリヤウ</sup>裏を肩に掛けると、目的地はダバンクエラオのバライだ。

途中の川原でアルコルランプを点し、小切<sup>コウキ</sup>の準備万端を完了したわたしは草原も駆け登りながら北<sup>キタ</sup>の山<sup>ヤマ</sup>を突<sup>ツ</sup>きすすむのだった。

禪<sup>ぜん</sup>だけがた<sup>た</sup>げ<sup>げ</sup>て<sup>て</sup>いる金<sup>きん</sup>裸<sup>だ</sup>に南の國の昼<sup>ひる</sup>下<sup>した</sup>からの陽光がいりじりと可<sup>た</sup>烈<sup>れつ</sup>な情<sup>じやう</sup>念<sup>ねん</sup>を燃<sup>も</sup>し<sup>し</sup>續<sup>つ</sup>け<sup>け</sup>てくる。

ダバンクエラオには、なにも言<sup>い</sup>わ<sup>わ</sup>ないで、こつそりと、エミール少年を招<sup>ま</sup>いた。

「エミール・デレ・この下の川で泳<sup>およ</sup>ごう。背<sup>せ</sup>中<sup>ちゆう</sup>へ車<sup>くるま</sup>つけてやるぞ。」

少年に背<sup>せ</sup>け<sup>け</sup>す<sup>す</sup>方<sup>かた</sup>々<sup>々</sup>ぬ黒い背<sup>せ</sup>中<sup>ちゆう</sup>を向<sup>む</sup>けると、他<sup>た</sup>愛<sup>あい</sup>もなく誘<sup>い</sup>惑<sup>ごつ</sup>にかかると、

インバン河のせせらぎにあがる飛<sup>と</sup>沫<sup>ばく</sup>へ金<sup>きん</sup>切<sup>き</sup>声<sup>こゑ</sup>を出<sup>い</sup>して

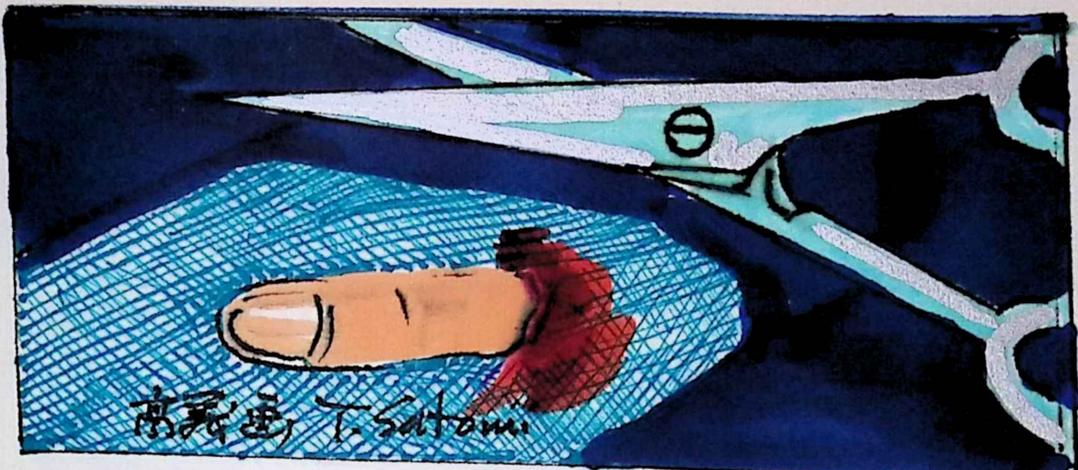
喜<sup>よろこ</sup>ぶ<sup>ぶ</sup>の<sup>の</sup>だ<sup>だ</sup>った。

金<sup>きん</sup>裸<sup>だ</sup>の少<sup>せう</sup>年<sup>ねん</sup>を背<sup>せ</sup>に<sup>に</sup>した<sup>した</sup>ま<sup>ま</sup>、し<sup>し</sup>だ<sup>だ</sup>いに深<sup>ふか</sup>ま<sup>ま</sup>つ<sup>つ</sup>て<sup>て</sup>い<sup>い</sup>く川底<sup>かぞ</sup>を踏<sup>ふ</sup>むと、水<sup>みづ</sup>面<sup>めん</sup>はもう首<sup>くび</sup>のあ<sup>あ</sup>た<sup>た</sup>り<sup>り</sup>だ。ざぶんと水<sup>みづ</sup>面<sup>めん</sup>をよぎると、ふたたび美<sup>うつく</sup>しい飛<sup>と</sup>沫<sup>ばく</sup>が上<sup>あ</sup>り、とき<sup>とき</sup>に虹<sup>にじ</sup>が理<sup>り</sup>わ<sup>わ</sup>れてくる。少年<sup>せうねん</sup>は歡<sup>たの</sup>喜<sup>しみ</sup>の酔<sup>よ</sup>料<sup>りやう</sup>に入<sup>い</sup>る<sup>る</sup>の<sup>の</sup>だ。

水<sup>みづ</sup>際<sup>ぎわ</sup>に立<sup>た</sup>つて夕<sup>ゆふ</sup>オ<sup>オ</sup>ルを使<sup>つか</sup>つ<sup>つ</sup>て<sup>て</sup>い<sup>い</sup>るあ<sup>あ</sup>た<sup>た</sup>し<sup>し</sup>の格<sup>かく</sup>好<sup>こう</sup>を眺<sup>なが</sup>め<sup>め</sup>ていたが、それ<sup>それ</sup>に<sup>に</sup>増<sup>ま</sup>して純<sup>じゆん</sup>白<sup>はく</sup>な石<sup>いし</sup>頭<sup>かぶ</sup>の泡<sup>う</sup>立<sup>た</sup>ち<sup>ち</sup>か<sup>か</sup>また<sup>また</sup>鬼<sup>おに</sup>力<sup>ちから</sup>なの<sup>の</sup>だ。

「<sup>つ</sup>が<sup>が</sup>は<sup>は</sup>君<sup>きみ</sup>の番<sup>ばん</sup>だ。ハルモリブの石<sup>いし</sup>頭<sup>かぶ</sup>か<sup>か</sup>いた<sup>いた</sup>ら<sup>ら</sup>と<sup>と</sup>ころ<sup>ころ</sup>に<sup>に</sup>塗<sup>ぬ</sup>られ、少年<sup>せうねん</sup>は泡<sup>う</sup>沫<sup>ばく</sup>の中<sup>ちゆう</sup>に息<sup>いき</sup>づく堂<sup>どう</sup>の幼<sup>ちゆう</sup>虫<sup>むし</sup>の<sup>の</sup>よ<sup>よ</sup>う<sup>う</sup>に<sup>に</sup>可<sup>た</sup>愛<sup>あい</sup>い。

若<sup>わか</sup>影<sup>かげ</sup>に導<sup>ま</sup>入<sup>い</sup>された少年<sup>せうねん</sup>は時<sup>とき</sup>鳥<sup>とり</sup>の足<sup>あし</sup>弟<sup>てい</sup>の物<sup>もの</sup>語<sup>ご</sup>り<sup>り</sup>を聞<sup>き</sup>か<sup>か</sup>ず水<sup>みづ</sup>た<sup>た</sup>か、す<sup>す</sup>べ<sup>べ</sup>て<sup>て</sup>の<sup>の</sup>し<sup>し</sup>の<sup>の</sup>に生<sup>せい</sup>命<sup>めい</sup>を認<sup>た</sup>め<sup>め</sup>るア<sup>ア</sup>ニ<sup>ニ</sup>ミ<sup>ミ</sup>ズ<sup>ズ</sup>ム(萬<sup>ま</sup>有<sup>いう</sup>精<sup>せい</sup>神<sup>しん</sup>論<sup>ろん</sup>)の段<sup>だん</sup>階<sup>かい</sup>の少<sup>せう</sup>年<sup>ねん</sup>には<sup>は</sup>楽<sup>らく</sup>しい物<sup>もの</sup>語<sup>ご</sup>り<sup>り</sup>に<sup>に</sup>違<sup>ちが</sup>い<sup>い</sup>ない。



瘤とり爺さんの話に自分自身の六本指を認識したのがよく、俄然、切除していいというほいの気になった。とにかく、痛い、痛くない、が最大の問題なのだ。用意のゴム紐が巻きつけられた。手の甲に赤いマーク。そのあと、また赤黒いアクリル製の糸が塗りこまれた。マサキツト、「ノー マサキツト」痛くはないと言う。アクリルの上には拂拭のためのアルコールが使われると直ぐに色が褪せて、しとの地肌が見える。少年はたまらない位の不思議も思っているらしい。すかさず、わたしは刀を握っていた。

「エアプレイン（飛行機）はこないかな。上を見てもいいよ。」

誘笑されて、少年の前頸部の皮膚が完全に伸びきったとき、わたしの右手に力が入り、げじつと弱く鈍い音がする。

する。

か細い手ぶたえをふえ、いまエミールの指は完全に切除されたのである。

「マサキツト（痛いかな）」

「ノー マサキツト」 「もうツシんだ」と、少年の耳元

で言い放ったとき、すでに持針器は捻られ、ホルマリン

縮糸は通さ小っていた。すばやく水を二重に結びつけると

「見てもいいよ、ルツク。」

エミールにそう言ったが、創口には黄色いリバガーゼ

そして四つ折りの純白のガーゼが被せられていたのだ。

「いいものを足せてやろうか。」

少年は、切除された自分の第六指をじつと見つめてい

たが、その手に付着する血液を見て

「ブラッド、ノー マサキツト」と誇らしげに叫んだ。

真夏の太陽は、依然、インバンの河川に、斜めに  
の草原に輝り映入している。どこからか、時をとり遣えた  
鶏が騒ぎをやっていった。

二月二十八日、川下り鶏の音が聞こえる。時刻は五時  
十分だ。朝寝坊の自分にしては稀な起床時刻だった。  
エミールのこゝとが気になつていたので少し知らない。

早朝のエスメラルダ界隈は文字通り静寂そのものである。  
つた。インバンのせせらぎに調和して、カラバオ(水牛)  
の嘶(な)きか、谷川に転(ま)る水車の音に似て、ほのかな郷  
愁を誘うのだった。

清流に水浴して、禪(ぜん)一つの格好で草原に坐つてみると  
そろそろ夜明けらしい。あたりが明るさをとりもどして  
くると何処(どこ)からともなく出たすの音が聞こえてくる。だ  
から感傷屋のわたしは、無関心でいられない。

エスメラルダの朝明け、マンゴの梢(かき)にさやく寝  
いっしが消えて、ひんかしの……と、ひそりでは  
啼(な)みながら河峯(かみ)を離れ散策した。少し歩くと、不寝番の  
明け番の中島が立哨(たてすゐ)していた。

「御苦勞さん、ああそうだ。昨夜は、馳走(ちしう)になつた。少  
く散歩してくるよ。」  
「とちうへい」

「きのう手術した子ももの家、河下のバライだ。」  
「あと七分です。」中島は時計を見ながらそう言ったか  
例(れい)のごつい防水装置の腕計(うでか)を見て言ったにすぎない。  
起床(きしょう)をかけたのは任務完了だ。何か嬉(うれ)しそうに声(こゑ)をつた。

大和(たいわ)大橋(おほはし)の手前(てまへ)、つまり橋を渡(わた)らずに、右(みぎ)へ折れて、  
大きく曲(ま)かると、足先(あしさき)に朝露(あさつゆ)の感触(かんじく)が快(た)い。いつか読(よ)ん  
だブラウニングの詩(うた)を思い出したりした。

二十八年三月

動くこともなしに金色に染まっている雲を見てみると、  
久しく思ったことのない生への執着をふつと感じる。  
夕バンクエラオ家の、その倉しげなバライから、もう  
一条の煙が立ち上っていた。今日一日、またもする倉  
しい生活への祈りででもあろうか。

よく見ると、開閉窓を押し上げたその下に、坊主頭の  
エミールが笑っていた。白い繃帯を包み込んだ右手を得  
意げにわたしの方向に向けて、「シゲナ、シゲナ」と迎えて  
く小る若し元氣そうだった。

午後の繃帯交換の時刻を伝えて、引き返してくる嬉  
しさ、その水に続く希望めいた明るさは、明日へ、そして  
明後日へ、そしてまた水劫に連つていようと思えた。

十一 愛する心 愛される心

二月は逃げるとも一般的に言われる。わたしたちは、

ネグロス島西ネグロス州のインバンの河岸で三月を迎え  
た、常夏の土地とはいえ、体の倦怠が加わり発汗量は増  
すか後半夜の気温降下も著しい。こうした非衛生的な環  
境に加えて、道路補修、架橋作業で兵士の体力も限界  
が来はいめた。戦況不振、敗匪の横行、テロ事件、そし  
て打ち続く凄惨なまわる空襲、友軍の劣勢、こうしたも  
のも刻々のうちに覺つていくわたしたちは自分自身で決  
意すべきことや処理すべきものは夫々心の中で纏め上げ  
ていた。

三月一日付けで、陸軍衛生軍曹に任せられたわたしは  
申告を兼ねて、シライの連隊本部へ出かけた。同じく諸  
連絡にやつて来た島本中隊長と一語にエスメラルダ  
へ帰っていくことになったが、コンセプトゥン残留の患  
者診療のこともあり、そこで途中下車することにした。

金身にさわやかさを思ひながら、コンセプションの椰子林へ踏み入ると、患者の木内が椰子の実を割っているところだった。

診察と投薬をすませ、昼食のあとエスメラルダへ帰隊する準備をしていると、分隊長に用件もあり、軽い運動しかねてエスメラルダに行くという木内が同道させてほしいというのだった。

曲りくねった道も最短に縮めて、可能な限り、直線的に踏破してみようという二人の協定をして、二人は同行することにした。何の気兼ねもしらない木内とわたしのせ帯であった。高原からの風が強く木々の葉裏が乳白色にざわめいている。

畑をよぎり、川を渡って平地へ出ると、午後二時の陽光は灼熱の炎を放ち、生きとし生けるものを焦がせて

しまうかの感がするのだ。喉頭がからからだ。

途中、一本松付近に忽然と姿を見せた現地人も敗匪と決め込んで尾行していくと、全然無事のシベリアンであったり、しかも呼び入らされて、コーヒートを振舞わされた恥かきもやった体験もこの時のことである。

明けると三月七日、大和と大橋と大和小橋の落成祝賀の宴が張られた。橋梁完成の慰労と士気昂揚のための宴会なのである。中隊長以下中隊全員が近くの茅畑に陣取り粗野な野武士の感概を思う場面でもあった。

街を離れてもう数十日、酒の味さえ忘れていた兵隊たちは、ガソリン臭いウイスキーで結構楽しめるようだった。もちろん、わたしもその例外ではない。車座をとり、あるいは座を外して乾し交わすその酒類の味は甘露であり、一同は次第次第に酩酊の域に追いつまされていくの



であった。折しも頭上をグラマンの編隊が通過したが、  
 平然として睽み返すほどの気強さになつていた。

中隊長の指示、指名によつて、さらばバコロドが歌わ  
 れ、安本節、よさこいが出、阿波踊りのはじまる頃には  
 夜もかなり更けてしまつていた。

輝やく星座の光が一まわ白さを増すと、一人倒れ、  
 二人去りして、芋畑の会場は、もう四、五人しか残つて  
 いないようだ。

三奴、田中万治、後たちと相撲をとつたり、都々逸

ハ木郎も歌い、更には後の阿波踊りに打ち興いながら  
 酒を飲み尽くしてしまふと午前一時を少し過ぎていた。

「萬治帰ろう。」  
 「うん、いおう。」  
 田中も誘つと、彼も  
 わたしに応じる。二人は鍛工分隊の傾斜を転がるように  
 通りおりたか、どうにか本道に出た。千鳥足も

たどたどしく、やがて大和大橋にかかる。

「萬治、こつちに来い。」  
 酒に酔い知れたわたしであ

つて北水面上二十四メートルのこの大橋から田中萬治を失  
 いたくはない。細心の注意を払つて、無事に萬治を、そ  
 して自分を通過させねばならない。全身の血液がドツド

ツと頭の芯に逆流してくるようだ。  
 橋も無事に渡り切ると、その安堵の心に隙が生じたの

であらうか、遂に二人は肩を組み合つたままどつと右岸  
 の畑の中へ崩れ落ちた。

少し寒けを感じる。かさかさとも鳴る葎摺水の音で、  
 マイス畑に墜落したことがわかつた。

「田中、分隊までしようとした」と、呼んだが、彼は動け  
 ず、こゝなとこで寝ましやうと言ひ、ぐうぐう寝込んでし  
 まつた。止むなくわたしも彼とこゝで一夜をすごした。

眠がめると、もう夜明けだ。天空を横切つて白い雲が流し、銀河かほやけり、天空そのものに溶け入つてしまふ。田中も揺り起こして帰り、指揮班への帰りみち、東条、三木、勝瀬、新地等の進級についての申し入をもと考え、しばらく和手曹長に訴えた。

その日の中隊の行動は、徴発である。

常夏の緑のこころに、戦禍は拡大さ小っていた。米軍機の末敵に競々とする現住民の予前に、忽然と現れ小で、日本軍隊は景慮無慙な徴発行為を平然とやる。とは言え、止むに止まぬ行為ではあつた。中西分隊と行動を共にしたか、イガオ、鶏、マノ、サーピス、カラマイアラア、マイス、トラテシなど、目録しい物品も自在に強要するのは、良心の呵責に耐えぬことである。しかし中隊の食糧不足打開のために止むを得ぬ手段であるうた。

その日、谷中分隊の収穫は、豚二頭、鶏七羽、米三ガシタだった。帰途、柳子林の中に棲んでいる土民からトバ(柳子酒)を貰ひ受けたのは嬉しかった。

夜は谷中軍曹の班に招かれて、班の小宴に連つたが留守役として徴発行為に参加しなかつた。F上等兵、K上等兵などと肉あつた論争があり、すっかり興は醒めてしまつた。初年兵の懊惱、古年次兵の立場、兵の進級にかかわる問題、渦巻く不平不満は上部への突き上げとなるのだ。怒号と騒音へ馳けつけた上野伍長と共に、下や下をなだめ、たしなめ、仲裁はしたものの、心の中には何だか割り切れないものが残つていた。

夕刻から、低く垂れ込めていた雲が露点に達して雨となり、次第にその激しさを加えて来た。

わたしは、田中の隣で、雨の漏る竹床へ横になつた。

灯しの柳子袖が怪しく光っていたか誰かが水を消した。暗闇の中で更に眼を閉じ、谷中分隊長に抱ついた三好を抱つたそのことを考えていた。そして、いましかたの一件とを文五に考え合わせたりしていると思つて頭の中は怪しい火の玉のごとくに文錯してくるのだった。

分隊内部での議論も、理は理として双方に一応の理解はできるものの、強度な自己保存の発現はやかに組織の結合に危害を加えるのだ。矢張り全体構成の一員としての社会性の欠如が指摘されてくるのだ。悲愴の分隊長、谷中の心も思うとき、不安な分隊団結に叙しいしものも思うのであった。

また、この日の徴発行動中、故意に谷中の命に背いた三好の言動も赦さるべきでなかった。部下に裏切られた苦悩も処理し得ず苦悶している谷中に代わって、三好に



制裁の拳を振ったのがわたしであった。雨脚にかまけられそうになる正義を信じていても、三好を抱つたという後悔は去らない。煩悶は依然として湧いては失せ、失せては湧き象んでくる。

「おい萬治、起きているのか。」と、田中にささやき、先日は、中隊長から達せられた時間厳守に因する解り言を語ってはみたが、心はなお冥々としたままであった。

眠れぬ雨のその深夜、此の憂い体をして余しているとして「小野の蠅に射されました。」と伝令かやって来た。

「なに蠅に刺されたって。」 指揮班に引き返し医療班

を取り小野の所属する上野分隊へ走ると、兵舎の階の中

で唸っている小野の音が聞こえた。声の劇しさでその

痛みの程がわかるのだ。塗薬して、パピナールの皮に注

射をするとき、不遇の兵士から寄せられている期待と、

小野重太郎 香川、三豊郡、高倉

上野重太郎 徳島、麻植郡、東山村、又山

(190)

その期待に添うべき自分自身の任務の重さを感じ、  
とったのである。上野班長は、小野に対する明朝までの  
諸注意を残し寢床に帰つてくると、もう眠っている田中  
と起さぬよう気を使いながら毛布を覆った。

雨に冷えたわたしの全身に、田中の温りが急速に伝わ  
って快くすまないような気持ちになった。

三好はもう眠ってしまっただろうか。三好の寝ている  
はずのところには寢息が立っていない。……と、何故人  
間らしい者が、わたしの枕元に近づいて来たように思え  
た。もちろん、ただそのように感じるだけで、その人が  
何者であるのか、皆目、判定しかたない。あたりには暗が  
漂っているだけだ。か、しかし、体がびくびく動いてい  
るようだ。三好だ。三好に違いない。と感じた刹那  
すぐ起き直り、全身のすべての神経を研ぎめて、いま自分

の周辺に発生するかも知れない事態の收拾に努めようと  
するのだった。

暗黒の空間に顔も姿も見えないが、なにが精神の動揺  
に堪えきれないで、声も唾も殺し、激しい息で肩を動か  
せて泣いている三好点一であるにすかないと考えた。  
腕を伸ばして探るわたしの指先は人の腕が触れるのだ。  
同時にわたしの掌に握力が働らく。

「三好、はじめに出したその声は意外に高くあたりに響い  
いた。」

「班長」と呼ぶ声は六張り三好だった。

三好は、わたしの性格をよく識っており、自責の念に  
かられてくるわたしの心を和らげるために近づいて来たのだ  
だった。

「ありがと。おまえが来てくれなかつたら、明日の朝

(191)

まで眠れずいただろう。よく心配してくれた。今夜は  
 とう遅い。久し振りに一しよに寝てみよう。

わたしはこう言ったが、嬉しくて今にも泣けそうだった。三奴は毛布の中へ入って来て、いかにも嬉しそうに  
 背も丸めて甘えるように、こちらへ寄り添って来た。

考えてみれば、三奴は、わたしの当番兵として長い間  
 苦業を併<sup>い</sup>にしにくれた。去<sup>き</sup>りの七月頃だったか、後<sup>あ</sup>業  
 吉兵長が熱発した当時も、わたしと共に全<sup>すべ</sup>くを傾けて看  
 護に尽くしてくれた。糸の快復のため全霊を傾けて努力  
 して、いまわたしのために尽くしてくれたといつてもよい。  
 後の経過が思わしくなく、途方にくれて悩み苦しんで  
 いる夜半に、こうして三奴はわたしの所へやって来た  
 ことだった。そして彼が住んでいたところ、和歌山の話な  
 どいろいろ話してくれたことがあった。とう、あれ以

来八が月も経<sup>た</sup>っているのだった。

三奴とわたしは、互いの胸に昔と変わらぬ戦友愛をよ  
 みかえらせ、この日、インバン河の畔で区切られていた  
 わだかまりは、言いかぬ力をこめて美しくも抹殺<sup>ま</sup>さ小  
 てしまったのである。

### 十一 患<sup>い</sup>者

このような事件があつてという訳ではなかったが、バ  
 コロドを離れてのこの方<sup>かた</sup>、判然と捉えられなくなったの、  
 わたしの心よめるものは、或る種の嫌<sup>えん</sup>せ感情であつた。  
 日々の生活そのものに規律も希望もない。自分の先々が  
 全然見透しのつかぬまま生<sup>なま</sup>殺<sup>ころ</sup>しの様に生きていくのが堪  
 えられないのだった。上官も同僚たちも、みんなはらば  
 らでただ己の事のみを走っているかと思われる。こんな  
 に奥まった地帯の住民ですら各地での戦いの結果を知つ

幽霊入った

マーセ. ① っ。静かに、またやって来たご主人  
 バーナ. ② 前と同じ姿だ。死なれた王さまに似ている。  
 マーセ. ③ あなたは学者だから、それに話しかけてご主人なさい。  
 ホレイニオ。  
 バーナ. ④ 却、王様に似ていませんか？ よくご主人なさい  
 ホレイニオ。

(195)

将校宿舎の方へ回ってみると、中隊長はすでに岩番  
 の曾根一を伴ってバコモド市に出向いており、そのこ  
 は猫の子一匹いなかった。  
 ポツポツとリズミカルに落ちてくる滴を受けつい  
 る一枚の紙片に気付いてよく見ると、どうも英語で印刷  
 されている詩行らしい。拾い上げてみると、それは、  
 Shakespeare's Hamlet の詩らしい。その中には幽霊  
 の入ってくる場面が書かれてあった。  
 \* Enter Ghost.  
 Mar. Peace, break thee off; look, where it come again!  
 Bar. In the same figure, like the King that's dead.  
 Mar. Thou art a scholar; speak to it, Horatio.  
 Bar. Looks it not like the King? mark it, Horatio.  
 幽霊の代名詞に「鬼」も使った。学者のホレイニオだ

(194)

\* 高宮 登 愛媛 越智郡 波方村 樋口 高宮 ぬ一さん (戦死)

ていようだが、お水お水には何もしらなくていい。  
 ある日、わたしのしとへ味代本の急病を報じて、高宮  
 が駆けつけた。また例の虫標突起炎が雨降したかも知  
 ない。この上もなく悪臭な味代本を築いて野中分隊をた  
 ずねると、果たして彼は局部の腫みに堪えかね、激しい  
 煩悶を見せていた。ランツ氏に其の診察してもらったが、  
 痛みほど症状は進展してなかった。ただ雑食、特に織  
 維の多い食品ばかり食っているため胃腸が痛みだした  
 かとも思われる。二日前にその様な症状を出したことが  
 あったのだ。  
 三射二本と葉を食えて帰ってきたが、二昨夜から降り  
 続いた雨は、まだ止みそうになかった。陰気なものを  
 感じながら、軒下でひとり思いに耽る自分であった。  
 夜界一帯、雨に濡れた草原の緑が印象的だった。

\* (Whisky <sup>sixty nine</sup> 69.)

(196)

「これは、なぜ絶望と語せないだろう。わたしは何回も読み返したか、そのことか理解出来なかった。」

この時、想い浮かんでくるのは神戸の街だ。居留地の丸善で、洋書の立ち読みしては胸をときめかせた青年時代の自分自身か思い出されるのであった。

欲しくもない煙草を、何本もくゆらしていると、指揮班でウイスキーの飲み合っているらしい。長田、安井軍曹、富田伍長たちの囁きが聞こえてくる。彼等とて、酒でも飲まぬと治まらぬ、突ま詰めた気持ちになっっているか知られない。

その夜は田中萬治と二人で色々話し合った。彼の物語る瀬戸の内海の光景や生活ぶりも遂にわたしの心を動かすことはできなかった。

グラマン機、ロッキード、重爆コンソリーテッド、や

ノースアメリカ等々盛に入り乱れて来襲する昨日今日である。友軍では、あすかに、北ビルマの戦況が活発化している情報が入ったか、これをとぼんの一部か知られないし、あるいは信じられない誤報か知られない。

茅畑を横切っていると、「ドクトル」と呼ぶ者がする。振り返ると、現地人だ。手籠を小脇に抱えて、こっちへ来るのは、この辺に一軒しかない現地人のバライに棲んでいるかみさんである。

「やあ、えし振り、誰か病人のし。」

「いいえ、ドクトルに上げたいものはカレーとビーフステーキね」と言って笑う。この四十二才の未亡人はわたしを採してうろついていたらしい。

「この間までいた指揮班のバライを出て、このごろ、あそここのバライに住んでいるんですよ。」

(197)

と云つて、わたしは、川向うの谷中分隊の宿舎を指さした。川岸に孤立している破風の破小屋だった。今夜七時においでください。岐度ですよ」と、未亡人は念を押して帰っていった。

夕方、小松分隊にいと、おおおわお、かみさんが呼びに来た。約束の七時には、まだ間があったが、わたしは彼女についてバライの奥へ入っていった。

そこには盛り沢山の山海の珍味が用意されていたので、なからず敬馬いだ。

この夜は格別の用件もなかったらしい。ただ何とはなしに我々がエスメラルダを去っていくことを導いてくる土民の話を聞いての招待のようであった。

さいふと馬走になり、おしやべりした。英語を使うことか、なかつたか、この夜は夕ガワグは話さずに

英語だけの会話にして話を進めるようにしたので、小かけていた単語や表現法を思い出し、何かと勉強になった。翌三月十五日は午後から下士官以上の集令があった。会場は、昨夜訪れたかみさんのバライであった。ここで、中隊行動のすべてか、はつきりと明示されたのである。

陣地は太郎山に築かれることになる。連合軍の上陸も直近らしい。一瞬、軽い不安が、そして焦燥の影がわたしの胸を掠めたか、時機到来の感概は一入深かった。

心隔てぬ戦友グループは、それぞれ水、椰子、酒、タバコの乾杯を交したのである。五、の武運長久を祈る心情なのだ。後、中島、田中、谷中、三好、そしてわたしは、さか回す杯に深い祈りをこめて、情の水は、なみなみと注がれ、そして乾き、小っていくのだった。

